WASON
HQ
1104
J74+

Jan. 1891
no. 248

女學雜誌

第二百四十八號　明治二十四年一月十七日發兌

少女途上暴人に遇とき何如にすべきの答七。

田舍詩人、亂酒詩人

新聞紙の道德（中島俊子）。

歲晚述懷（寸牛廬主人）。

下六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 248. JANUARY, 17TH. 1891.

第二百四十八號目次

EDITORIAL :—The Rustic Poet. The Intoxicated Poet.

WORDS AND DEEDS :—

MISCELLANEOUS :—When a young girl happens to meet with a ruffian on the way while no body near to save her, what should she do? "Discourse on Labour." (   )

CRITICAL NOTES :—The Name "Christianity." On Reading "Koware Yubiwa," (Fudo Kenzen). The suppliments of the "Woman's Magazine" and the "Nation's Friend" —— "Koware Yubiwa" and "Mugenkio." (Tenshu Romin).

PHYSIC :—Sounds, Light, (Yoshida Nobu).

NOVEL :—The Improvement of Society, (Nagashima).

HOUSEHOLD SCIENCE :—How to Cure Chilblains.

LITERATURE :—Japanese Poems. "Nanko" was not a loyal subject to "Nancho." The night before Oishi Naizo no Suke's battle of revenge.

CHILDREN'S COLUMN:—To-morrow (Yuki.)

CONTRIBUTED ARTICLES :—

CONCERNING WOMEN.

NOTES AND NEWS.

社説　田舎詩人、亂酒詩人

言行錄

雜錄　一少女途にて暴人に遭ふ傍らに人なし、將に辱を受けんとす、少女は何如に爲すべきや●ボンダレッフの「勞役論」

批評　こがれ丸●基督教會と云へる名稱(新誌子)●こわれ指環を讀む(不動劍禪)●女學雜誌及國民之友の新年附錄こわれ指環と夢幻境(天四牢民)

理學　音●光●音と光とを同時に發するものに就て距離を知る(吉田伸子)

小說　社會改良(長嶋操)

家政　シモヤケ治療法

文學　和歌○楠公は南朝の忠臣に非ず○大石內藏之助仇打の前夜(管茶山)

隨感　新聞紙の德義●議會の休日(中嶋俊子)

寄書　歲晚の述懷(斗牛廬主人)

兒盤　明日(ゆき)

時事　廢す可からず、廢すべからず●近頃の議會●田中正造氏●漢法醫の建白●數件(可愛子)

問答

新誌

通信

女報

週報

第三版

百人一首講義

製本落成

上製美本　五十錢　郵稅六錢

並製淡裝　三十五錢　同　四錢

正月の稽古に宜し　歌留多遊びに宜し

遺物に宜し　詠歌に宜し

製本落成

此百人一首講義は、歌の意味、文法、を極く分るやうに說明し、其上詠み手の畧傳と其歌を詠みたる時は何如なる場合なりしかを一々分說し、小倉山紅葉の色々を一ときわにして、千古口に暗誦したる歌の心に、大光明を發たしむ。此講義を讀みて后ちに歌を朗吟すれば、味ひ新たなり、かるた遊びにも、歌の修業にも、遺ひ物にも、正月中の讀物にも、至つて宜し。代價甚はだ安けれども、尙之を安くし、即はち無代價にて之を買入るゝの方は、本年內に女學雜誌一ヶ年分の前金を拂込むにあり、然らば本社は之をお祝ひとして呈上すべし。

女學雜誌社

東京廢娼運動費出入廣告

女學雜誌二百四十四號(十二月二十日發兌)掲載同日迄の出入　八、二二五

入

差引殘高

美作國加茂村久永彌平治、同妻サツ兩氏　〇、二〇〇

房州山人　〇、五〇〇

無名氏　〇、五〇〇

紀伊國片山雪江氏　一、〇〇〇

長門……………中島秀一氏　五、〇〇〇

北海道茅部郡尾札部村山川キヨ氏　〇、二二〇

計　一五、六四五

右現在す。

女學雜誌 第二百四十八號 明治二十四年一月十七日發兌

社說

田舍詩人、亂酒詩人

わが幼なき頃ろ、片田舍にて聽けりし歌に、「詩を作り歌を作るより田を作れ、なにかれせうより金貸をせよ」とあり、俗調紛々たりと云へど、村公子肉食の愚を嘲り倒ほして快言ふ可らず、左れど、此を罵しれるものゝ言論亦た一種の歌なり。詩歌の能く眞理の發揮し、人情の秘奥を穿つことを思ふときに於ては、眞詩人の出現を待ち望むの念切ならずんばあらず。エメルソン曰く、惣ての歴史を飜譯せよ、大詩人の生れ出でたる時は即はち一紀元の新に畫せらるゝ時なることを知らんと。吾人數年來しば〳〵詩人の德を賞揚し、眞のポエトの早く現はれ來らんことを懇望したり。時勢僅かに搖動し近ごろボツ〳〵、詩人めける人の頭をもたぐるを見る。然れども同時に厭ふべき文臭新たに釀し來り、未だ眞詩人出でざるに早く詩弊の吹き流れんとするを見る。雛鷄孵らざるに卵臭既に甚だし、吾人は其の種の腐れることを察知す。

近ごろの新詩人に、概むね通ずる二個の言行あり。云へらく、世上の俗物うじ蟲の如し、都門の空氣濁りて吸ふことを得ずと、即はち去つて山林に入らんとし、切りに田舍、田舍、と云ふ、何某は何の山に山ごもりし、何某は何の寺に寺入しぬと、而して此を以て殊勝高等の振舞と見做し、凡そ脫俗非凡の詩歌を吟じ出さんには、是非とも都を去つて田舍に行かざる可らず、紅塵万丈の空にはミウス飛ばず、靜雅閑邃の片田舍にのみ詩歌のインスピレーションはありと言ふなり。是れ痛ましき謬見と云ふべし。彼等亦た李杜酒仙の狂を追慕して、詩人は必らず酒を飮むべきものと心得、酒を飮まざるものは詩人めかずと殘念に思ひ、酒と詩情とは是非とも伴隨すべきものと陋斷し、丁年に足らざる若文士すでに老成を氣取りて、漫に醉ひ漫に放言す。憫れむべきの至りと云ふべし。夫れ彼輩は兎に角千百人中の秀才なり、もし能く其才を伸して直く正道に秀づることあらんには、アツパレ至誠の大詩人となりて、吾神洲の民を益すること亦多かるべきに、未だ眞にポエトの德行を知らずして、輕々しく唐宋不平の詩人に外迷し、悲

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

しひ哉、仁を味はずして穀を噛み、たゞ詩弊を襲ふて詩の眞德を失なはんとす。痛歎此上なき事と云ふべし。

夫れ閑雅幽邃なると都は素より田舍に及ばず、雲鳥躍り、野花笑ふの好景は蓋し都門に絕す。グレー歌ひけらく、

"The meanest floweret of the Vale,
The Simplest note that swells the gale,
The common sun, the air, the skies,
to him are opening paradise."

孰れか田舍を愛せざる者あるべき。左れど眞詩人は田舍を愛するとの少なきにあらず、國を愛すると更に深かるべし、彼れ草木の枯るゝを見て人事の定めなきことを痛歎す、然れども英雄の空しく死し、寡婦の徒らに恨むを見れば、痛歎一ときはあらんとす、鳥の高く天に登るを見れば、詩人が心は朝の聖風に洗はるゝが如けん、然れども綠兒罪なくして笑ひ潔士誘はれずして身を立て家を興すの狀を見れば、更に淸快を加ふるの感あらんとす、左るを人を見ずして草花鳥虫を察し、人事の榮枯盛衰を鑑みずして、一葉一枝の起伏去來に胸を打んとするが如きは、恰かも是れ天地を見ずして畫幅を賞觀し、巨木を愛せずして盆栽を玩ぶの僻疾に同じく、到底健全圓滿なる美術心あるものゝ行爲にはあらず。夫れ都は國の中心にして、一國の盛衰朝夕を以て流轉するの渦心たり、四千万同胞を生かし若くは殺す所ろの初元大率此所ろより發す、傍らに立つて之を觀るの詩人そも幾干の斷腸やある。更に小なるものに付きて之を言はゞ、昨日の富豪忽まちに產を破りて今日途上に流浪するものあり、今宵の書生俄かに用られて明朝忽然馬背に跨がるものあり、橋上不幸を歎じて身を投ぜんとするものゝ涙は、波頭船を舞はせて笛を弄ぶものゝ舷上に落ち、議院塲裏政費節減の論嘩すしき時、塲外の車夫酒に醉ひて喧嘩騷々しきの躰たらく、一に皆な詩の好材料たらざるは無し。蓋し大賢は市に隱れ、詩仙は都に住す、民を思ふものゝ衷情容易く都市を去ると難きが故也。之を以て、ロングフエローは都の詩人たり、テンニソンも亦た都詩人たり、チーツチルス、倫敦市街の朝景色を吟じて云はく、

Ne'er saw I, never felt, a calm so deep!
the river glideth at his own sweet will:
Dear God: The very houses seem asleep;
And all that mighty heart is lying still

あゝ孰れか詩人は都に住ひがたしと云ふ、都を厭ふの詩人は

概むね國に益なし、其詩の民を漫怠遊惰に導びかざると殆んど稀れ也、吾人は亡國の詩人が筍の如くに生ざるとを祈る。詩人は素と議論せず、性常に直覺す、之を以て其歌ふ所ろインスピレーションに由らざるは尠なし。彼の似而非詩人、天來のインスピレーションを得ず、此に於てか酒を飲み、腦を痛ませ感情を狂はしむ、酒氣紛々として初めて句あり、一斗の酒を飲みて一句の吟を蒸發し、醉顏人に誇りて自から大詩人の如くす、歎ぜざるを得ず。古人有爲の才を懷ども、施こして實用する所ろを得ず、慷慨恨を呑んで不平を洩すに由なく、僅かに酒に醉ひて胸中の大煩悶を遣り、偶たま絶望の思ひを迸ばしらせて數行の苦吟を爲しつるともありき。左れど、素と是れ不吉の出來事にして常に初より可とすべき者にあらず、然るに今の年少才子、未だ先づ何等の試むる所ろあるにあらず、亦左程に鬱勃たる思想の止み難き者あるにもあらず到底何等の必要あるにもあらずして先づ徒らに彼の絶望者の惡弊を慕ひ、飲酒放蕩を詩人の常態と誤解して漫々日々に遊怠す。此故に詩人歌客は大率ね俗物にして、吟詠亦た俗中の手細工に過ぎず、神を泣かせ人を動かさゝると固より其數なりと云ふべし。狂人の言語は必竟狂人の寢語に過ぎず、如此く酒狂人の醉語は到底アルクホールの揮發に外ならず、安くんぞ之を以て聖純高傑の詩歌と爲すとを得ん。ミルトン云はく、謠曲の作者は、酒を飲み放蕩を爲しつゝ筆を執るとを得べし、彼の神德を賛美し、人事を詠歌せんとする所ろの詩人は、木の盃より清水を飲まずんばある可らず、詩歌なるものは惡魔の酒にあらず、神の密酒なりと。あゝ眞正天來のインスピレーションを蒙らんもの、何如で、アルクホールの刺擊を必要と爲さん。

吾人は近作の詩歌に、世を憂ひ、人を愛し、世務に憤ふりたる雄篇あるとを未だ聞き及ばず、而して既に田舍田舍と云ひて退隱せんとするの若詩人頗ぶる多きとを聞けり。啻に之のみならず、帝國議會開くるの宵には、所謂る文人の酒に醉ひ惡女に戯むれたるとを記したる怪文字に接し、未だ愛國志士の腸を斷ち心を刺すの秀吟を唱へざるに、早く既に冷罵冷嘲の諷叢文字多きを見る、夫れ今日の日本は千古非常の時に際遇す、苟くも心あらんもの何を以て冷々萍々たるとを得ん、ひとり詩人は此際、山林に隱れて枯木寒鳥を友とし、酒に醉ひ太平樂を吐て、世外の遊息を爲す、如此きは是れ脱俗にあらず、人類の義務を脱する也、義務を脱するもの若し俗を脱すとせば、君子聖人は無上の大俗物ならん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

言行

○人　アリストートル曰く、人は万事万物の測量機の如し、其手は惣ての器械中の器械なり、其心は惣ての形具中の形具なり。

○謙遜　王莽謙恭下レ士時と。シエクスピアはブルータスの口を假りて曰く、大望の雛は謙遜なり、謹しんで梯子を望み跼まりて上に登らんとす、既に上り了れば、揚然天上の雲を望み、足下の階梯を輕蔑す。

○良妻　ラマルチン妻を失ひ嘆じて曰く、妻を失へる人は家を覆ひたる老槐樹を切倒されたるが如し、爾來世の憂事と難儀とは直ちに獨者の心の上に落ち掛り、もはや之を慰さめ救ふものなし、右の手の枯へたる如く、天の使の其翼をもがれたるが如し、動けば則はち地に落下するの心地す、眼は濁り、涙ぐみ、死の來らんとする時、常にありし慰さめ手を慕ひ思ふ。

○世界　世界は女の世界　佛蘭西のルソウ曰く、世界は女性の爲の書籍也、其智識は讀むとよりも觀察するとに由て獲らる。

○人生の苦樂

もみぢ

われ若し善惡の裁判は此世にありと思ひ。わが心を察するものは、人間の外にあらずと思ひ。事を爲すの刺激は功名富貴を得るのみと思ひ。死してのち万事休すと思ひ。わが愛する所のものは忽まち死し、而して死してのち、愛を交ゆるの途なしと思ひ、世上の人は友にあらず、皆な油斷の成りがたきものと思ひ。寸前悉とく暗黒にして、如何なる珍事此后に起らんかと思ひ。如此く思ひ思ふて止むとあらずんば、われは寧しろ死するの優れるとを信ず。

左れど、天に上帝あり、能く人の見ざる所ろを察す。わが靈死せる后に存して至正永遠の賞罰を蒙むる。わが事を爲すは功名富貴を得んとにあらず、功名富貴は風前の燈に似たり。上帝われを愛し、われ亦た人を愛す、故に只だ愛によりてわが義務を盡すと覺悟し。愛はいつ迄も落るとなし、智識も廢り、國語も變はるとあるべし、左れど愛は生命のあらん限り變るとなし、人の靈魂永遠に存するを以てわが愛また永遠に存すと知り。人は皆な人也、われ誠を以て待すれば皆なわれに信切なりと覺悟し。世上如何なる出來事ありとも、其事上帝の眼下に於て起りぬ、故にわれ安からざるとなしと安心せんには、われ戰に臨むも死に瀕するも常に平和なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雜録

一少女途にて暴人に遭ふ傍らに人なし、將に辱しめを受んとす、少女は何如に爲すべきや。

但し、右の少女は其時匕首を懷中し居たり。

明治女學校の倫理科にて、近ごろ、教師右の問を掲げ、女生の答へを要めたるに、答議さまぐ\なり、其類を分ち、各々の代表とすべきもの四つ五つを左に列ね、讀む人の批評を寄せらるゝ人あらば幸はひなるべし。

(一)。たとひ暴人は無禮を働らくとも、われ、人を殺すは道ならず、然れど自分に恥辱を蒙むるも面目なく、又此上の悲しみなく、何如とも詮方なし、私の考にては、先方の暴逆の擧動なれども、運の極めとあきらめ、暴人の所置に從ふより詮方なし、但し一部分は報ひて宜し(此答者唯一人)

(二)。暴人たりとも彼れ人間ならば普通の事は分るなるべし、去れば十分に身を卑くし、彼を諭して免るゝことを試みるべし。彼れ其道理を聞入ざれば、如何樣にありとも彼を欺むき好し不正なる事を言ひても餘儀なし、詮術なければ彼を欺むき了すべし、彼れ尚ほ承知せず暴行を加へんとせば、止むことを得ず力の及ぶ限り初めはたとひ、刀あるとも、先づ腕力の及ばん限り、逆らふべし。去れど彼の力勝り辱しめを加へられんとせば匕首を示して之を威すべし、たとひ、身危ふしとも、彼を殺して免れんと初めより思ふ可らず、心はたゞ自己防護の爲めとして用ふべし、如何に暴人たりとも刃物を以て向はるゝときは恐らくは逃げ去るべし。かくても尚ほ去らず、いよく\暴を增さば、万不得止、彼に傷を附くるともして免かるべし、此塲合に臨み人を害するは惡しなど、躊躇す可らず、かくして身の辱しめを受るは厭ふべきこと也。

(三)。若し私しが斯る塲合に在ましたらば、仕方がありません、決して敵對はせず先づ自から出來る丈け逃げる工夫を致します、たとひ其折匕首を持ちて居ましても、先づ先方より傷つけんとする目前にありませんなれば決して之は用ひません、勿論途行中匕首を所持するとは宜しくありません、亞米利加ペンシルバニア近邊の土人のさわぎの時、又はアイルランドの土民蜂起のとき、刀を所持せぬものが尤とも安全でありました、刀を持たぬが平生尤とも安全と存じます。

(四)。此婦人匕首を持つと雖ども人の生命を害するとは爲すまじきもの也、又虚言を話して逃ぐるも人に欺はるものゆへ道を守ると言ふ可らず、故に此の如き際に當ては、相手の心を靜め、道德上の眞理を話し、よく心の中に悟り必らず人間として守るべきの道を話し聞かすると肝要也。

(五)。人の性元と善あり、然れども成長して他より導かるゝまゝに善ともなり不善ともなるものゆへ、何事も誠と眞心とを以て解き聞かすれば、何如なる人も其心に罪を悔ひ遂に善に從がふとあらん、今ま此の暴人は殘酷にも婦人を辱かしめんとし傍らに救ふものなし、又此婦人は道を解き聞かさんとするも最早及ばず、少しく猶豫するときは遂に身を辱かしめらるゝの時たりと想像す。かくて、自個防禦の爲なりとも、他人の生命を害するは己れの生命を害するよりも善あらず、故に詮方なく惡しきとなれど惡しきとの少なき方に就き、幸わひに匕首あるを以て自害せんとす、是れ實に殘念也。

(六)。數多の罪惡ある中、最とも惡むべきは人を害するとなり、之に反し自個を尊重するとも亦大ひなる義務なり、今ま此婦人正に害を受んとし、他より助くるものなし、もし之を防ぐともなかりせば天理に合ふべき乎、未だ身を殺しても人を害す可らずとは教へられざりき、唯だ自個防禦は爲されば成らぬとゆへ、此婦人匕首を持てば防ぐ丈け防ぎしのち、自個防禦の爲め之を殺すも害なし。

(七)。かゝる時は、止を得ず暴人を殺すべし、實に「爾勿殺」の言に反く如く又「何事も人を先にし己を後にせよ」との教に反く如し、左れどそは他人の權利を傷ふ時に於ては挽回し難く、自己の權は取返すとの出來得るが爲めあり。それとは事變り、若し辱しめらるゝ時は、神より與へられたる身躰を汚し、再たび取返すと能はざる也、故に自己防禦の道を以て之を防ぐべし、但し自己防禦は必要以上に越ゆ可らず。

(附錄)此の答、くやしいと思ふ餘り斯く考へて參りましたが、殺したとの判然たる罪人すらも容易に死刑に處せず、鄭重に致し候ものを、慷慨悲憤の餘り早率の際怒りをもて之を殺すは惡しきとの樣に思ひて參りました、基督がペテロの劍を拔きし時に止め玉ひしとも思ひ廻らします、己の敵を愛せよと教へ賜ふに最とも大切なる人の生命を取るとは何如にも善き處置の如くに思はれなくなりました、私

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

し思ひまするに、狂人にあらざる限りは、暴行を加ふるは只だ慾を充さんが爲にして、人を害するの意なきことと存じます、然るを一意、たゞ恐れと騒ぎとにて逃れんとしては遂に彼をして益々暴行を長ぜしむる樣ならんと存じます、故に斯る時は、一層靜かに致し只だ彼の憫れむべきことを深く心に感じ彼を導びくの念を以て諭しなば、必らず辱かしむることなきかと存じます、但し尚ほ止を得ざれば殺す方よき樣に思はれます、能く斷ずることが出來ません故に、かゝる時の心得を何卒伺ひたく存じます。

(八)。生命は天の支配する所ろにして、尤とも大切なるものなり、故に此生命を大切に守るべきの道人間たるの權利義務となる、若し眞の道を守らず成すべき事を成さゞれば、重んずべき我生命をも亦人の生命をも害するに近きなり。我もし途を行くとき、暴人來りて暴行を加へ辱しめんとする時、もし手向はざれば遂に辱かしめらるべし。此時に際しては、持たる匕首を以て暴人に傷つくるとも此は自個防禦にして差支へなし、如何んとなれば我は廉耻を知るもの也、其の辱かしめらるゝや實に生存中尤とも重大の事にして、人間にして恰かも禽獸視せられ、肉躰に係はり亦た人間たるの價値に係はることにて、暴人は我に對して其生命を失ふをも顧みざるの慾にて我を辱かしむるに等し、故に免かれ得る丈け免れ、愈よ止むを得ざれば是非なし、傷を負はし去るとも是れ自個防禦にして不可なし。然れども我は人の生命の重んずべきを信ず。故に唯だ防禦として、傷を負はしめんのみ。

ボンダレッフの「勞役論」

魯士亞のサイベリアに、六十六年の苦役を過ごし、晝は無限の感慨を懷きて妻子と共に數畝の畠を耕やし、夜は寒燈煌々たる下に老眼老手を摩つてやうやくに一篇の文章を草し、題して「勞役」と云ふ。埋もれて現はれず沒れて聞えざる一老夫ありけり、其名をボンダレッフと云ふ。彼れ一と度び其書を魯士亞皇帝に獻げて皇帝之を嘉納せず、二度び之を公板に附せんことを請願して許るされず、遺恨十年將に死せんとして其書の末に記して云へらく、

わが子よ、之をわが遺言書となせ。われを寺院の墓に葬むると勿れ、わが腕を以て耕やしたるわが日用の糧を供へた

る彼の田地に葬むるべし、葬むりには、粘土又は砂を埋むると勿れ、但だ滿たすに肥へたる土を以てし、上に墓標を建てゝ印しとなすと勿れ、年毎に麥を其上に播きて常の如く收穫すべし、たとひ世の末に此地他し人の所有となるも、わが墓は長久なへに穀を實らせて世に生命のパンを供ふべし、是れわが一世の精神、「勞役」の論を主張したるの志望を達するもの也。

偉人の精神は久しく沒するものにあらず、后ち暫らくにして哲人トルストイ伯此の遺篇を發見し、滿腔を開いて其說を懷き、深く之を崇敬して自序一章を添へ、近ごろ世に公にしたり。吾人其文章を讀みて、感慨極まりなし、世上肉食座臥の人、空々として一生を送らんとするに先だち、何ぞ先づ其の靈文字を一讀せざるや。

批評

○こがね丸

幼なき頃ろ聞ける昔々語り、爺は山に薪とり、媼は川に洗濯す云々の事、今となりて之を思ふに、趣向妙絕、眞とに能く少年の心理を洞察して、之が發達に裨補すると少からぬのお話しなりと云ふべし。近ごろ、樣々の小說は出れど、殊更ら年少き人の爲にとて作れるは、いと〳〵稀なりしに、此類の著作には分きて當役あらんと思はるゝ漣山人、「こがね丸」と云へるを著はして、其欠けを補はんとせり、無くもがなと思ふ條りの往々蛇足を添ゆるとありと云へど、要するに甚はだ可愛らしく出來上りて、少年には面白き讀物の一つとなりぬ。字を四號にしたる、及び雅味ある繪を所ろ〳〵に挿めるなど、用意至れりと云ふべし。犬と虎とを主人公とし、鼠、牛、兎、猿、鶏、猫、狐を客とし、當に用ゆべき家畜の材料を略ぼ遺す所ろなし。キワドキ所ろに滑稽の味を加へて、大人の讀み物とするも亦面白し。

○基督教會と云へる名稱　新　諸子

福音週報近ごろ二三週間の社説は、植村正久氏が筆にて題して右の如く言へり、明治六七年以來の西教小史は巧みに叙述し、一致教會内の改進系を明らかに摘示せり、斯教信奉者のみならず凡そ近世史に着目する人の當に一讀すべき者なり。

○こわれ指環を讀む　不動劍禪

寥々短篇の中儒教々育の悪風、男尊女卑の陋習、壓制結婚の弊害及び此等惡風、陋習、弊害の中に處し、粛殺慘憺の境界に幾度か斷腸の思ひを爲し幾度か鹽からき涙を呑み、中心酸々たりし一女子が反動の勢力によりて茲に思想の變遷を來し、其變遷したる思想は忠實眞摯、能く己れが欲せざる所之を人に施す勿れの格言に適ひ、犠牲献身的となりて愈々强固に、其記念として指環の玉を拔くまでの状態を描寫したるの手際ほと〳〵感服の外なし、描刀斷水水更流、嗚呼人事の意の如くならざる豈啻こわれ指環の主人公のみならんや艱難は忍耐を生じ忍耐は練達を生じ練達は希望を生じ希望は吾儕をして耻を來さゞらしむ、と此言こそ實に能く此主人公の一身を穿ち得て餘蘊なしと云べけれ、余は常に斯る人生を寫し出したる優美高尚なる小説の出でん事を望む、而して斯る小説の常に其腦漿の緻密なる其眼光の精彩なる、婦人の手より出でん事を望めり而して曩には若松賤子の忘れ形見を得今復一年を經過して同雜誌の新年附錄に於て此短篇を得たり其社會を益する果して幾何ぞや東坡曰く萱草雖微花、孤秀能自拔、亭々亂葉中、一々芳心插

○女學雜誌及國民之友の新年附錄

こわれ指環と夢現境　天　牢　四　民

文學海の波瀾再び湧くべし、と一二の識者が昨年に於て今年を豫言せし事は果して中るや否や吾人は未だ之れを知る能はずと雖も兎に角新年早々、其各個目的の異なるも共に文學上の好伴侶として世にもてはやさるゝ兩雜誌に於て此佳小説を見るを得たるは吾人の最も喜ぶ處あり。四民は昨廿三年此兩雜誌の新年附錄たる蘆の一トふしと粘華微笑に妄評を試みしより以來久しく管城子を携へて雜誌場裡に練兵するを怠り居りしが故に今や文陣に向はんとして俄に磨墨に糊するも紙面の馳驅極めて自在ならざるを覺ふされば、倚考量の後、とも思ひしが素と淺才狹識の我れ、如何に腦漿を消耗するも到

底騖に亂鞭を加へて飛黄に次がんとするの無効なるを悟りしものから、さては他の批將軍を後楯に、たとひ妄評原に耻死する迄も、先づ一騎駈けの功名手柄は我がものにせん、いで、やッ、と、かくは。

先づ其種類を別てば、女學雜誌のこわれ指環は實際的小説に國民之友の夢現境は理想的小説に、屬すべく、而して其主眼とする處は、彼れは、壓制結婚は決して夫婦の愛を全ふする能はざるを叙して自由結婚を世に鳴らす、にあるもの、如く、是れは、厭世的宗敎の能く苦患を去る能はざるを述べて、樂世的宗敎の信仰に因らざる可らざるを示す、に在るに似たり惟ふに人の生涯に於て、無形の人に屬する歷史は信仰上の歷史より大なるは無く、有形の人に屬する歷史は夫婦間の歷史より大なるは莫し、此故に若し其宗敎の完全にして其信仰の正實なりせば、快活、新鮮、崇高、敢爲、剛毅、他愛、謙遜、なるべく、其結婚の恰好にして其契情の相適さば、和美、溢愛、歡笑、悅樂、精勵なるべしと雖ども各々之れに反する時は、彼れに於ては不安、疑懼、驚恍、絕望、苦痛、是れに在ては悲哀、痛嘆、恚怨、羞殺、泣咽等人生の艱辛甞め盡さゝるなきの生涯に終らんのみ、此くの如き暗慘の歷史は人の腦裡に印象せらるゝ事最も深く、其文字に現はるゝ時、聲色殊に憫むべきは吾人此兩小説に於て觀るなり。而して夢現境に於ては神韻漂渺、文に照對あり波瀾あり漸く終末に至て其天父に救を乞ふの狀、切なるは轉た吾人をして篋端に近き蟋蟀の秋を訴ふる聲よりも尙切なるを感ぜしむ、只擱筆の少しく輕くして首尾の權衡を失するなきかを恐る。こはれ指環は先づ切に筆を起して文脈縷々一絲亂れず其再び故に復らん事を願ふの終りに於て餘韻嫋々、恰かも南枝の花信を遮る殘雪を恨んで睨眈たる黃鸝聲空しく謎るに似たり、實に此結局あつて初めて全篇の重きを加ふと云ふべし。人云ふあり、此兩小説は著者たる嵯峨の屋主人自己及びつゆ子女史自己の一歷史のみと。其事實の證明に至ては四民の更らに關する處にあらずと雖ども、然れども凡て自己の歷史は其形而上と形而下との何れに拘はらず、風に依て火を吹くと同じく別に勞力を要せざるを以て、世の小説家若し此易きにのみ就くに至らば、今年の小説界も亦修飾せる日誌備忘錄堆を成し籬を看て壁を察する生文學家の蹂躪する處とならんのみ、吾人豈に嘆息せ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

さらんと欲するも得可けんや。彼の森々たる天地の現、羅々たる宇宙の象、何物か小說の材料たらざるべき、積極的の命運を有する人、消極的の命運に處する者、何れか小說中の人物たらざるべき、山川草木も禽獸蟲魚も一併し一總し一串して其眞理を發揮し其眞相を描寫し得るの技倆ある大小說家の出でん事こそ、吾人が今年に於ける最一の希望なりとす。而して吾人は常に、鷗外漁史が所謂單稗よりも寧ろ複稗に於て價値の貴きを置かんと欲するなり。

夢現境に於ては章句の中至て妙なるものあるかわり又至て妙ならざるものあるを認むと雖も、こわれ指環に於ては極めて佳なるものあらざる代り又極めて玼瑕に乏し。彼れに在ては就中=園中には紅黃白紫の四季の花が今を盛りと咲亂れて、綠葉の間から笑顏をちらちらと天に見せて、そよふく風と叫いて居ます、鶯の音は百花の間を亂れ飛んで、多情にも朝露を散らして居ると、風を切ッて飛ぶ朝燕は紺色の羽をつぼめて霞に入かと見る間、忽ち身を倒樣に中反り、柳の枝をくゞッて飛べば、彼の柳はゆら〳〵として鹿の鼻面をあぶッて居ます、梅が香を櫻の色にもたせて、柳の枝に咲かせ、然も海棠の媚を持たせた樣な木は、そも何といふ木でありませう?花は日をかざし影を弄して、止まりかける蝶の羽を撫れば、枝はゆら〳〵と風を迎へて、蝶の魂をわなゝかせて居ます。＊＊＊=の如きは清艶殆んど類を絕つの筆にして好個一幅の畵圖と言ふも尙盡せるの評にあらず。こわれ指環に在ては=＊＊＊見合を致した上で、嫌と申た處が其申條の立つ筈もなく、只恥しき思をして、先方に顏を見らるゝ計りなるは、實にどうもつまらないと思升たから、態と片意地に見合ひをする事は嫌ですと、母に申張り升た。=及び=＊＊＊＊寧ろ暫くでも、嫁入はいやとおもふ内に、もしやどういふ人かと幽かにポーッと樂しんだ處もあつただけが、まだしも幸＊＊＊＊。=の處實に精緻を極めたるの文にして重簾の裡に入となりし處女が心の寫眞、其衷情歷然として透見すべく春の屋主人の細君も是れに因て氣色を失はんとす。」又夢現境に於て孤影が一箭を放ちて雁の翼を縫たるは八丈傳に於ける犬江親兵衛の舊轍を襲ふものありと雖ども、只其の雁瞬時に化大して孤影を罵り遂に是れを掴擢して千仭の谷底に放擲すること、及び、こわれ指環に於て、下婢が筆の美しきに見き

れて覺へず前妻の有りし事を唇頭に上せたるは、吾人もまさに其主人公の地位に倍して一驚を喫したり。又夢現境に於て冐頭月を寫すの一段は馬琴が八犬傳に於て王丹鹿の龍經によつて龍の種類を擧げたると一般吾れ斯く迄に細寫すべきの要を見ず、殊に竹取物語の赫奕姫を再現せしめて其容姿を描くところ著者餘りに舊套を脱せんとを勉めて却て此仙女に一點の俗味を帶ばしめたるを覺ゆ。こわれ指環に於ては舊夫の宿柳睡花の徒たらずんば竊玉偷香の輩たる事を充分に認め、且つ己れの轍を踏まんとする世の婦女子を救ふべしとの決意と希望とを抱懷しつゝある有爲の女史をして、何故に故との偕老に再び見へん願ひを殘こさしめたる？吾人得て著者の意を知る能はざるなり。

附言、南翠外史は魍魎に於て其主人公に命名するに猿渡智之助を以てせり、是れ餘りに滑稽めきて爲めに全篇の輕きを致さしめたるは惜むべしと評する者あり、然れども吾人を以て見れば、彼の陸軍大臣大山巖、名古屋金城新報の記者石原烈、高知縣長岡郡長島村笑兒、東京府會議員梅川忠兵衛、法律學士手塚太郎、法學士水町袈裟六、工學士的塲中、等の諸氏の如く、實際に於てすら或はいかめしく或ひは可愛らしく、或は多情らしく、或は芝居らしく、或は滑稽らしく、或は小説らしき姓名を見るが故に、敢て批難すべきにあらず。吾人は、小説中の人物に命名するは、宜しく其性質に由り、行爲に由り、志操に由りて、各々適好のものを撰ぶを最も可なりとなす、况んや猿渡智之助は、猿智恵に富める一個の狡漢なるに於て、是れを其名に現はす豈に何の不可かあらん。

大きくなつて、およめさんに行くさ、金の指環をやろさいの。金の指環は好けれども、こわれ指環は欲しくない。

理學

吉田伸子

○音

琴、三味線、鐘、太鼓、其他種々の物躰が振動する時、爲に其近

傍の空氣が一種の波を起し、其波が耳の鼓膜を打て、聽神經の媒で、腦に一種の感覺を與ます、通常は此感覺を指して音と申しますが、物理學では左樣でなく、空氣の波動其物を音とは名けます。偖て此音波が空氣中を進行します速度は、空氣の壓力と溫度等に依て少しの差はありますが、一秒時間平均の速度は、三百四十「メートル」乃ちおよそ三町餘です。水は空氣より四倍早く音を傳へ、固躰は尙ほ早くして、木材は、十倍乃至十六倍空氣より早き速度を以て音響を傳達します。

○光

古人は光を以て發光躰から飛で來る極て小さき分子からなるものだと申す說乃ち分子說を信じましたが、今日の處では、分子說は波動說に打勝たれました。波動說では光も亦音の樣に或る物質を媒として振動する一種の波であると申すので、其媒となるものを「イーセル」ト名けます。光が空間を通過する速度を見出したのは、デンマークの星學者ローマーで、同人は木星の衛星の蝕を起すに遲速あることから氣が付て、遂に光の速度は一秒時間に十八万六千英里であることを算へ出しました、音の速度と比べませば非常な差であります、併し斯樣に速やかなる速度を以てするも、太陽の光線が地球に達しますには、八分餘りの時間を費します。

○音と光とを同時に發するものに就て距離を知る

鉄砲、煙火、雷電などの樣に、音と光とを同時に發するものを、遠方からながめませば、先づ光を見て、然る後に音を聞きます、之れは前に述べました通り、光の速度と音の速度と一樣ならぬからであるは勿論あれど、光は非常に早きものゆへ、地球上でピカりとするものは、如何に遠方から見ても(矢張り地球上よりするならば)、其物がピカりとすると同時に、我々は其ピカりを感ずると云て宜敷のです、夫れ故鐵砲、煙火、電などの光を見てから、其音を聞くまでの時間は全く音が、發音躰から我々まで來るに要する時間だとすることが出來ます、例へば日比谷の原で打上ける煙火を番町邊て見ますに、玉が開てからヒー、フー、ミー、ヨー、四秒目にポーンと云ふ音が聞へますと致ませば、其處から日比谷迄は凡そ十二町餘り有のです(音は一秒時間に三町餘を經過する故に)。又電光がピカりとしてから、ゴロ〳〵を聞まで、六秒を隔てますときは、其雷公の太鼓は我頭上十八町餘の空に在ると心得ねばなりませぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

社會改良

第一回（中）

長島操

政談は財産家が己れの財産を保護する爲にするので、無財産の人は少しも痛痒を感ぜぬ筈だ、今の位置では人の事を八釜敷言ふたり、世の事を憂へたりする時でない、先づ自分一身を圖て、決して他人の世話を燒かぬがよい、餘り燒過ぎると虚無黨、社會黨の樣に成て來る、日本でも近頃は、壯士とか稱ふる、亂暴過激の壯年が澤山出來たが是等は害はあれ共、少しも世を益すると云ふ事はない、元皆無財産無資力の書生が、徒に西洋高尚な學問を喰咬り、架空に走るの弊害だ、高尙の事は後の事、己の位置を高め、財産を作つて、政談でも何でも勝手次第に働くべし、今は己の身を卑め、高尙の事を忘れて、社會は如何にあらうと其潮流に從ひ、立身出世をする工夫が肝要だ、其れには政治家は斷念して、商人に成るがよい、如何程切齒扼腕しても、無財産で己の糊口さへ出來ぬ身分では、社會の改良抔とは思ひも寄らぬ話だ、只腕力に訴へて、死を決すれば立派の政治家、立派の愛國者と思ふは大きな誤りで、丸で狂氣の沙汰と言はねばならぬ、政治家に成て功名せんとは、中々容易の事ではない、一身の處置を苦む人が、何で一國の進退が出來る者か、其等は智識と經驗と財産を積めば自然に解る、蛟龍の能ある者は、何時迄も鰌鮒の池中には居らぬ、雲雨を得る時もあるから、暫く時を待て忍て居るが宜い……能くも考へて見な、政治家は何處から金が出るか、己の口は何を以養ふか、政權を握る樣になれば、大枚の月給を賜るから差支ないが其れ迄何に依て衣食する積りか、野に居て政治上に奔走するには、金は遣へど金にはあらず、難儀はすれど報酬はない、當人は名譽の積りで居ても、他目で見れば瘋癲白痴の擧動ではないか、世間の人が今の壯士に如何ある感じを懷て居るか、又自分では何と思ふか亂暴家粗暴家と言はれ、不名譽を取た人でも、其志は立派、然し財産がなく位置が低いから社會上流の人には容れられない、無財産の身で政治家に成ふと思はゞ、世間の人から斥けられ、自分の說は容れられぬ者と考ひなければならない、今血氣の勇に早ても、漸々勞して益なきを悟り、中途に志を變

じ、實業家に成らば世間の人よりは信用されず、二三年間も困難辛苦して少しく實業に慣れし時は、自分と共に學友でありし處の者は、既に上流にありて、中々追ひ付けず、其時に至て後悔し、早く實業社會に入らざりしを嘆けども到底及ばん……好し、其困難を凌で志操を變ぜざるも心中の鬱憤積で、始め實着家と言はれし者も、遂には粗暴過激に流れ、世人に容れられずして、終身下界に沈淪するか、左なくば、縲紲の辱を受て囹圄に呻吟する許りだ……、其れで快樂があると思ふか「紳士の語中、財產の件は、深く少年の神經を摩擦し、胸中爲に沸騰せし者と見へ、紳士が無財產と云ふ度毎に、少年の身躰震動し、頭髮より蒸氣の蒸發するを見たり、今紳士の言葉終るを待て、心臟より絞り出せし聲を、苦しき呼吸の間に夾み、私は酒は呑みません……、烟草を吸ひません……、衣服は寒を防ぎ、飮食は飢を凌ぐに足りて居れば宜う御座ります……、如何なる事をしても、自分一身丈は支へる積りです…………、元より亂暴輕卒の擧動をして、世間の人より惡まるゝ事は決して致しません、己の糊口の道を立てながら、實力を養ひ、舒々目的を果す積りで御座ります、「紳士は少年の氣の少く和ぎしを見て、隱かに、「政治家は花見だよ、碁將棊と、同じ事だよ、金を持た上にするが好い、今は思ひ止て、商人に成り、社會通りに從つて、早く蓄財の道を學ぶがよい、方向に迷ふては不可、上を眺めずに下を見るべし、餘り望みが大過ると、虻蜂取らずで、一も得る處はない……、只今何をして居るか。「少年は紳士の先の言葉に就て、何か考へ居りしが、最後の一言に、先の言葉も擊滅され」。今は何も致して居りません。(紳士)其れは宜しくない、早く會社へでも入るがよい、廢娼だとか、廢妾だとか、あんな下らぬ論をする者でない、廢してもよいと思ふ時には、政府の人が廢して異るゝから宜しい。「此時少年は以前の言葉に就て考ひ居たれば、今の言葉は能くも耳には入らず」。商人…今の商人に正しき人は……。(紳士)亦そんな事を言ふ、今商人の風習に惡しき處があるからと云ふて、改める譯に行かんから、其潮流に隨伴せなければ金儲は出來ん。(少年)賄賂の如き卑……。(紳士)其も金儲の一手段さ。(少年)道德の罪を犯しても……。(紳士)餘り甚しくなく、巧に。…(少年)…私御暇を戴きます。(紳士)廢娼論抔唱へては不可よ、人間が腐から。「是より少年紳士の家を立出て、街衢に

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

出づれば車夫」、旦那行きませう、御安く行きませう「他の車夫少年に附添ひ」、旦那御都合迄行きませう、極御安く、旦那、旦那「少年は車夫の附從ふをも知らず、一直線に道を急ぎしが、耳目は已に其働を失ひしと見へ、道に横はり居たる小犬に氣付かず」。キヤン、をー驚いた。(車夫)旦那行きませう、中迄で。(少年)宜しいと云ふに「少年は傍目も觸らず歩行したるが、今や繁華の地を通り過ぎ、人家稀にして通行人少く、鬱蒼たる松柏天を遮て、月光を蔽ひ、四面暗黑にして通路を辨ぜず。(少年)是は道を違へた、道に迷ふた」と獨言、立戻るかと思へば、戻りもせず、左を顧み、右を眄、心に頷き、間洩る月に透し見て、側の松の根に腰を掛け、嘆息して」、世は樣々だ、人は種々だ、古人は人の心の異あるは其面の如しと云ふたが、誠に名說だ、智者でも、賢人でも、自分の事は知てるが、人の事は知れぬと見へる、志の逢ふと云ふは仕方がない者、如何程親切に話しても、互に其意が通じない、性質の異なると云ふは又格別で、人の好む事も自分は好まず、人の嫌ふ事でも自分の好む者がある、是を思ひば同氣の人、共に契るは卿許り、是を思ひば同志の人、共に圖るは吾許り、常々自尊は必要と思ひながらも、卑屈心、如何なる惡魔か、自ら己を卑て、少しの疑ある時は、己に問はで人に問ふ、人は好々、敎は樣々、愚かなる者の悲しさに、何れを是非と別ち兼ね、彼に從ひ是に習ふ、或は迷ひ、或は過る、迷ひし後の世迷言、悔ひたる後の繰言も、月日は我と新ならず、少年老ひ易く、學成り難く、迷の中に年も暮れ、過未改めざるに齡老ひ、老ひたる後の物語り、昔は立派で有りし如く、子供に向て說法するも、只に子供の物笑ひ、斯くては……斯くては人と生れたる其甲斐ありや、世は塞翁が馬、有爲轉變定りなしとは云ひ、生れて以來、此年月、二十年が其間、心一途に思ひ續けて、未一日も……、物心覺へし日より未一日も……、國の爲……社會の爲なら、己一身犧牲にして智力の及ぶ丈盡力せんと思はぬ事は無りしに、如何なる惡魔が魅入りしか、今方向に迷ふて人に尋ねた、嗚呼我ながら過つた、クライブは一度戰略を人に謀て終身の恥辱とせり、余は方向を人に圖て、終身の恥辱を蒙れり、嗚呼迷ふた、過つた……、人に問ふから迷ふた、過つた、只自身に沈思默考して、判斷すれば宜しかりしに、……林子平にはあらねど余は四無しの少年である。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

家政

凍瘡治療法

なみ

人間の身體は常に熱を散布す、而して其熱は絶えず巡環する所の血液の中にあり、血液は心臟より出で、常に身體を巡環す、心臟は恰も血を注ぎ出だす喞筒の如し、亦熱の中心點の如し、故に心臟を遠ざかるに從ひ、熱度愈減じ、血の巡環また靜かなり。

若何かの原因により、血液の巡環止る時は其部分は忽ち枯死す、例へば甚だ寒き所に出て、身體を冷やすが如きは血の運行を妨げ寒氣甚だしければ全く止むる事もあり、亦只に血管を害するのみならず、神經を傷つくる事あり、手足の先きの如きは熱の中心點より遠き故熱度も少なく從つて容易く寒氣に害せらる、是即ち手足は凍瘡を患ひ易き所以。

凍瘡と云ふは只皮膚に痛み若くは痒さを感ずるものなり、其甚しきものは之を中寒と稱し、只皮膚に痛痒を感ずるのみならず、傷害を受け、瘍瘡の如くなりて容易に治せざるものなり、傷害の度に種々ありて其烈しきは一部分全く腐敗する事あり。

防禦法

小兒の皮膚は弱きもの故強き寒さに堪え難し、殊に病ひある小兒の如きは注意するを要す、亦足袋、靴下の如き餘りかたきものは血の巡環を妨ぐる故足を冷やし、凍瘡を患ひ易し、餘り小さき靴は尚害あり、概して小兒は大人より凍瘡に罹り易し、若空氣に觸るゝ所に溫氣ある時は亦凍瘡を患ひ易し、何となれば溫氣が蒸發する時熱を散布せしむればなり、故にしめりたる靴下や足袋は決して用ゆべからず。

血液の巡環あしき小兒は戶外に連れ出す時は殊に注意せざるべからず、血の巡りをよくせん爲め毎日其身體を柔かに摺るべし全體小兒は寒さを堪ゆる力弱きもの故常に注意して寒き時は弱き小兒は强壯の小兒と等しく戶外に居らしむ可らず、通常凍瘡の起るは極めて寒き時に非ず、少し寒き頃汗の出でたるまゝ外出する時、蒸發の爲めに皮膚の冷ゆるに依り凍瘡を引きおこすものなり、亦寒き所に出で、手足の冷えたる時之を暖めんとて急に火の側らにてアブル事あり、是また害あるものなり、何となれば冷熱急に變ずる故亦血の巡環に變動

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を起し、其結果は凍瘡となればなり、凍瘡は主もに足と手の指、足の裏、掌等に起るを常とす。

凍瘡の兆候

其始めは少しく脹れ、皮膚柔かになり、亦は痒きを感ずる事あり、亦甚しく脹れ、堪へられぬ程痒き事あり、尚烈しき時は水胞の如きもの現はれ、其破れたるあとに疵を殘す、甚だしき痛みを感ずるものなり、之が變じて恐るべき病となる事あり故に注意して治療するを要す。

治療法

凍瘡に罹らざらん爲めには充分の豫防法を施すべし、既に罹りし時は亦充分に治療法を用ゆべし、豫防するにはよく温度の散布を防ぐ物品にて身躰を蔽ふべし、例之ば毛糸の靴下、「フランチル」の下着の如きは最もよろし、若小兒にして發汗し易きものならば、其シメリたるまゝ戸外の寒き所に出さゞる樣常に靴下や下着を着替へさゝるを要す、斯る小兒は久しく戸外に居らしむ可からず。

凍瘡のできたる上は之を雪にて摺るか、若し雪なくんば氷にて摺り、その後フランチルにて蔽ふを可とす、決して火に暖む可からず、雪或は氷もて摺る時は皮膚の破れざる樣靜かになすべし、若此方法を以て治す事後くるれば甚だしき痒さを感ずるものあり、此時は酢と水と等分に混じたるものにて洗ふべし、樟腦の水、明礬の水を用ひるもよし、或は芥末を温湯に溶き、足を浸たすもよし、芥末の湯は始めに痛みを感ずれども暫くにして甚だ快くなるべし、亦時々洗ふ事も大ひに功能あらん。

若臭き事を厭はずんば石腦油を用ゆるも可なり、是は夜入寢する時塗るべし、若凍瘡のあとに疵ある時は「ヨヂウム」と云ふ藥を用ゆれば直ちに治すべし、而し斯る時には寧ろ醫師の診察を乞ふて藥を得るを可とす。

中寒

通常の凍瘡といふものより傷害甚だしくして多くは耳の邊、鼻の先、若くは頰のあたりに起るもの也。いはば面部頭部等は屢寒氣風雪に遇へばなり、時としては烈しく傷害を受くる事あり、中寒の所は始めに赤色を呈し、須臾にして紫黒色に變ず、最初には痛みを感じ、後には痲痺す、若指若くは足のさきなれば動かざる樣になる事あり、若氷りたる所に觸る

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れば冷やかに堅くなりしを知るべし、若此時直ちに治療せずんば瘍瘡の如く傷を殘すべし。

預防法は畧ぼ寒瘡を防ぐ法と變はるなし、即ち鼻、耳、頬等を寒氣にあてざる樣暖かに蔽ふべし、治療法に至つても亦凍瘡に於けるが如し、之を精しく書かんは重複なれば畧す。

隨感

○新聞紙の德義

中島さし子

昔し土佐の國に妾を有するものあり、其妾何某に通ずと流言す、妾を有するもの、親戚の一人これを聞き大に憤ほり通ぜりと噂ある者の親戚に談判に及びぬ、親戚も大に驚き若これをして實ならしめば何某をして割腹せしむるの外なしと決し百方實否を督せしかば全く其無根たる事判然したり、依てその由先方の親戚に告げ且曰く御申越の事をして實ならしめば親戚一同其本人をして割腹せしむるの存意なりしが扨虛妄なる事判然したれば此上貴下に於ては如何成さるゝ御所存にやと問ひたれば此の如き無禮の事申出而して其事實ならずば當初申出しものをして割腹せしむるの外なしと答へて割腹せしめたりと本人より聞き及びぬ今を去る僅廿年以前迄はかくも人の言語を重ぜしものかと轉た感に堪ざるものあり。今日豫算案の事に付き收賄の風說世に諠しくなりたり諸新聞のこれを掲載せざるもの少なし、若收賄をして實ならしめば諸新聞はこれを天下に顯はし惡風を矯正するの功勞を有するものあり而して若實を誤まり妄りに人を傷つけたるものとせば新聞紙は何を以てこれに謝せんとするや、新聞紙は虛說實說兩ながら記載して餘すところなきが新聞紙の本色なりとして已まんか、果して然らず新聞紙の德義何くにある乎。

○議院の休會

中島さし子

衆議院が十二月廿五日より一月八日迄休みたるを以て開會九十日間の割合に比して十三日の休みは過分なりとか或は議會が私しするものなりとか大に議院を咎むるもの、如し。焉ぞ知らんこの十三日の休み中は議員が最も強よく腦髓を働かせし時なりしを。

文學

池袋清風大人批（東京案山子の屋社中）

早梅

、日影も氷て殘る岡の邊の梅の林に雪ぞつもれる〔雪の内より梅が香ぞする〕

評。直しにて取意さやかならず、そは春の部に雪中梅の題あれは也。

、、消殘る高根の雪に夕月の匂ふも寒し梅の初花〔山の邊のさき〕

評。雪と梅とまぎらはしき耳ならず梅の初花突然のやう也。故になほしにて題をかふべし

春日

。渡〔打〕る人たえし野川の。桃〔橘の〕かげ夕日霞みて春雨ぞふる

評。人たえしの間に、せか、ノかを置かれば、耳にさはれり

、、夕月夜〔故郷の〕霞む野川の。青柳〔岸の〕の緑にけふる春の雨哉

評。たそがれには、緑の色もみえぬなるべし。

楠公は南朝の忠臣にあらず

管　茶　山

楠公父子は。南朝の忠臣にあらず。吾國の皇統の忠臣なり。尊氏謀反して。先。大塔宮を弑し奉りしより以後のしわざ。八幡太郎義家の子孫に。必。天下を取しめんといはれしなどいふ言をこしらへし事を思ひ合するに。數箇度の敗衄なくば。綸旨を申し下す意を生ずるとはなかるべし。尊氏初意の如くならば。今日いかなる天下になりなんもはかるべからず。されば。北朝のたち給ひしは。楠公諸將の力による事あきらけし。

大石良雄切腹の前夜

同　右

大石内藏介。細川侯の邸に在りし時。茶坊主二人を附けて。其便用に供せらる。其明日は。切腹ときはまりし前夜に。内藏介後架にゆかれしに。彼の茶坊主一人は。手燭を持ち。一人は湯をとりて從ひしが。たがひに涙を流して。聲を呑みてかなしびければ。内藏介これを見て。何故にさは泣るゝにかと尋ねられしかば。二人答へて。吾等此ほど御傍にありて。御懇意をうけ申しゝに。明日は御別れ申にあり候ひぬ。御名殘惜く候て。覺えずかくはなげき候といひつゝ。又むせかへりて泣きければ。内藏介は。顏色もかはらず。こは吾覺悟にもなるべき事ぞ。よくこそしらせ玉ひつれ。扨久しき間。御苦勞にあづかりし事。一方ならず。吾もなごりをしく候。何ぞかたみに參らせたく候へども。持ち來たりし物も候はねば。是は持ちふるしたるものなれどとて。一人には。紙いれの嚢。一人には。腰さげの巾着を與へられけるを。その二人の家に。今に寶とし傳へたり。大石はかりそめにも。人のなつきしたしむ人なりしと。西依先生の話なり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

兒籃

明日

ゆき

或所に可愛らしひ小兒がありました、何時も樂しげに遊んで居て何も心配もなければ悲みもない樣でした、朝起き出て朝飯が濟むと直ぐに家を出て、隣や近所の御朋友と打群れて遊び家に歸ると面白き事抔云つて內の人を笑はせました、此兒が或時一つの心配を起しました、夫れから始終其事を考へては沈んで居りました、何時も何か分らない事があると母さんの所に往つて聞くのですから世間中で母さん程賢こき人はないと思つて居りました、例の如く母さんの許に行き「母さん、何時明日が來ますか、敎へて下さい」と云つて尋ねました、母さんは之に答て「今日も間もなく暮てあなたが床につく時も直ぐだよ、そしてあなたが一つ寢て起ると夫れが明日であるよ」と云ひました、此小兒は夫で安心して其夜は眠りました、翌朝早く起きて、直ぐ母さんの膝下に行き、母さんの肩に縋りながら、小さき聲にて「母さん、今は明日ですか」と問ました、母さんは「イヽエ今は今日だよ、明日と云ふ事は何時でも一晩づヽ間があるんだよ」と答ました、小兒は之を聞て暫く考へて居ましたが直また平常の如く快なりまして、心配も消えました、それ故亦御朋友と遊んだり、面白き事を云つたりして夕方まで樂しんで居ました、夕方になると亦明日と云ふ事を思ひだして「母さん明日といふ事は何時です」と問ました、幾度問かへしても明日と云ふものは來ません、一晩さきにあるので、一夜過れば前には明日であつたのが、今日となつて、矢張り明日といふのは一夜間があるのです、何程待つても明日が來る事はありません、彼小兒は無益の事を心配したのです遂に母さんが云ひました「あなたが何時まで待つても明日は來ないよ、何時でも明日はあるが、近く來ないから、今日中に樂しまなければならないよ、明日を待つのはツマリ益にたヽない心配だからモーお止し、多くの人々が明日といふ事を思つて心配するが何もありはしないからあなたもツマラナイ心配もしてはいけないよ」、之で小兒は漸く分つて其時から明日といふ事を云はない樣になりました、實に私共は此話の樣に先の事を考へて心配してはいけません、今を樂しまなければなりません。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

寄書

歳晩述懐（旅中雜記一節）（其上）

斗牛廬主人

定めなき世の定めといふ大晦日も今日となりぬ。三百六十五日一日として日輪の西に入らざる事はなきに、今日ばかり何故に世の人心いそがはしく、千の妄念萬の煩惱を焼して此黄昏を惜むにや。今更に思立ちし如く慌忙して南北に奔走するも、大自在力をもて地軸の運轉を留むるにあらずんば、我ればかり聾となるも除夜の鐘は遠慮なく鏘然たるものを。さらば肱を廬中に曲げて巴黎の樓上哲學家を學ばんか、是も畢竟妄想の奴隷となりて鶴翁が胸算用に腦裏を見透かさるゝに等しければ、よしく〜一切の俗事を棄却し去つて麥飯に風雅の味を試み靖節が妙想を悟らんと、門を出てゝ僅かに二三時、身は既に都外十里田家の客となりぬ。

元祿の昔芭蕉が行脚せし頃は一枝の枯杖を痩腳と頼みて此二三時間の旅も一日の風流なりしに、今は鉄路の便を借り易々と霜枯の風に面を打たれずして十里の道を走るも、却て山眠る冬の面白味を知るに甲斐なきこそ口惜しけれ。さればとて氷る月影を辿りて霜叫ゆる鐘を數へん事、そもや牛に乗りしを嘆きし木節ありとも夢想せざりし逸興ならんに、我病餒の身を以て其狂を學ばざりし却てかしこしと、道念低き身は何事も己が氣儘に判斷して滿足を買ふぞ淺まし。思へば衰餘の我淺間下しに膓を凍らしたらんには蒲團いたゞく旅の風雅を悟り得べきに。車又車、尺寸の地を踏まずして旅したる顔するこそ誠に恥かしき限りなれ。さりとて都を離れしなれば、縱令十里の外に遠からぬも、草の窓を寒風に敲かし灰暗き行燈の下に端坐すれば、怪しげなる襖の繪も勿躰らしき一行物も身邊萬物悉く我を冥漠に誘ふの媒となりて、不便のノールが「距たりて友もなく哀れにも靜かなりし」と嘆ちし旅の句を思出し、去年の秋富士が根の松原に漂泊ひて出遇ひし翁の物語、又此春安房の一の宮に參詣して道連れになりし草刈娘の姿など、ありありと目の前に現れて、詩人にあらぬ我れ空想に腦まさるゝ事、如何にハロルドを嘲けりし身の今は却て嘲けらるゝ身となりしぞをぞまし。

田舎は今に陰暦を用ふるなれば、常ねに百倍千倍して忙がし

き此夜もなほ裕々、里の犬は月に吠へ、森の狐は飢に叫び、中々に寂しきこそ却て都の喧がしきを想起す種子なれ。都人は通宵東奔西走して分時もまどろまず、百萬の良心を四苦八苦の濁浪の中に捲込まれて、作りし罪を懺悔しては思はぬ罪を新たに作るも唯箇刹那の輪廻流轉、嗚呼、除夜の鐘陰々として聲を残し鶏鳴き東白まば、一天四海悉く瑞氣をもて充たさるゝものを。唯箇刹那の間に悲み、憂へ、恐れ、苦み、歎き、怨み、怒り、狂ひ、罵り、訴へ、目にも見ず耳にも聞へざる妄執の鬼と闘ひ、我身に我血を流して叫喚戰慄悶へ悶ゆるに。紅日屋角を照せば忽ちに喜び、樂み、祝ひ、壽き、忻然、揚然たるもの、そもや世の人心の不思議なる全能の神却つて訝かる事なからんや。若し改まる暦と共に汚れたる心も新らしくありて過去一切悉く洗ひ去らるゝならんには、除日千億萬斤の苦量能く擔ふて走るも、一夜明くれば纔離るゝ鳥と共に初日の出を拜み若水に汗を拭ふの樂もあれど、如何に年替ればとて積り／＼し罪障は消滅せぬものを、畫鶏暴竹そも／＼何等の鬼を追得たりとして觀娯笑謔恰も金色界に到りて白毫の光を拜む如きや。よし／＼此人間界の不思議なる變化を不思議ならずとして明日をもて極樂の門に入るとするも、機一發、日輪の暗冥を破ると共に、僅に數分抄前の極哀極痛なる慘苦を忘れ鼓腹して百年も千年も万年も長閑き月日を送りし如くあるぞ不思議ある、實に不思議なり、不思議ならずとするも猶ほ不思議なり。

忘れんとしても忘られぬは過去の歴史なり。わけて物に觸るゝ毎に想起して十年二十年を經るも腦裏に存在して消滅せざるは罪の歴史なり。我れ五歳僅に東西を辨へし頃母を失ひしは、佛者の説に依れば前世の應報ならんか、一代の此大不幸既に過去の罪障を滅せしとするも、知情の増すに連れて知らず知らざる中に友を欺き親を欺き血縁肉親を欺き終には我れ自ら我良心を欺きしぞ恐ろし、自然の物象に觸れ或は古人の訓誡に接する毎に栗然として背に冷汗を覺ゆるは二十年來作りし此現世の罪なり。是あるが故に筆澁り口訥り、春の晨に花を見るも秋の夕に月を瞻むるも唯我身浅ましく恥づかしく、日頃は寒山の句を誦して喜びしも今は市に漂泊ふ乞食より見劣りし心根、たゞ此まゝに悶死せんと濛々たる迷路を辿りて、一道の光明を望みし事も幾度ぞ。

時事

○廢す可らず、廢す可らず、

外山正一氏は高等中學廢す可らずと叫び、矢田部良吉氏は音樂學校廢す可らずと口說き、中村正直氏は女子高等師範學校廢す可らずと說諭す。何んぞ廢す可らざるもの丶多きや。而して吾人其論法を見るに、何れも只だ其敎育を重しとするの說にして、何故へ政府が今の如き澤山の入費を遣つて維持せざる可らざる乎の理由を辨ぜず、亦何故へ民間にて之が任に當る可らざる乎の理由を辨ぜず。中に就き外山氏は多少の論辨を爲し、民間にて之に當り得るものは耶蘇敎會のお助け學校のみと推斷し、而してお助け學校にのみ之を委賴するは亡國の策なりと言へり、二三年前宣敎師の學校は成べく高等中學の任を盡すべしと公言したるを今や全たく知らぬ貌に消却し、現時多少の保守熱あるに乘じて斯る策畧的の配劑を爲すこそ、學者に恥かしき業なれ。外山氏にして若し眞面目に斯る論を爲さんとなれば、彼の加藤弘之氏に倣ひ、學者らしく先づ前說の誤まりなりしとを陳辨せずんばある可らず。吾人は固より如此き諸官立學校を無用となすもの也。特に女子敎育の一點に付き自から經驗する所ろを斷言するも、政府は最早や手を下して民間女學校の發達を妨ぐるとを要せずと主張すべし。但し近頃の如き帝國議會の議事に際して吾人は細密快大なる注文を爲さじ、故に今年は著しく其歲費を減ずるに於て止むべしとのみ言んと欲す。

○近頃の議會

眞況吾人の知る所ろにあらず、暫らく波の鎭まるを待ん。

○田中正造氏

吾人は寧ろ君を重んず、君願わくは節を屈せず、餘り餘計の事を辨ぜず、凛然急所を刺して何如なる情實にも拘つらふと勿れ。

○漢法醫の建白

川合信水

淺田宗伯、伊藤玄朴諸氏、十數名發起し、皇漢醫學脩門てうものを設立し、漢法醫を將來に存置し、且つ從來の如く、漢法醫にも開業免狀下附せられたしと云ひ、此を目的とし、開業試驗規則改正の建議を、貴衆兩議院に差出せりと、戀舊の情斯の如きか、余輩は今日漢法醫の存置を望むの意なし、然れども漢土の醫書中見るべきもの少なからざるとを信ず、諸氏若し眞に我道を保存せんとせば、何ぞ筆を執りて、漢土醫書の飜譯に從事せざる、建白書捧呈の如き、余輩は唯其好名奇癖の疑を招き、頑固守舊の評を受るに過ざるものと思ふ。

問答

可愛子

問。貴社雜誌にて、颶船の說話をなされし吉田伸子は、當時いづれの御住居にいらせられ候や。

(野菊女史)

答。麴町區上二番町二十番地です。

問。府會議員の小島官吾氏は、基督敎信者なるや否や、信者ならば、何處の會堂へ出で候や。

(同)

答。先頃信者にありまして、牛込の會堂へ出られます。

問。日本人に最も適したる、餘り高價ならざる家政の書有之候や。

答。高價ならぬ家政の書では、藤尾六郎氏の家計簿記法(一冊二十錢)同例題(一冊十錢)京橋區彌左衛門町經濟雜誌社賣捌、村木經策氏の家政要旨(一冊六錢郵稅二錢)女學雜誌社發賣の物などでせう、外にはあつても高價なものです。

問。貴社雜誌に見ゆる撫象子、雲峰子、及び國民の友に見へし湖處子、嵯峨の屋、不知庵等の文學者達の本名を承りたし。(盛岡驚雪生)

答。雲峰子は磯貝由太郎氏、湖處子は宮崎八百吉氏、嵯峨の屋氏は矢崎鎮四郎氏、不知庵は内田貢氏です、撫象子は仔細あつてまだ公然名前を顯はしません。

新誌

可愛子

●立憲自由新聞　は發刊第一號、一月一日より、同八日まで立憲自由黨の急務と題せる、中江兆民居士の論を載せたり、其黨員の議慎を說くや、諸葛武侯の出師の表を引きたり、而して終に至て曰く、前より述べ來りたる所を括すれば、曰く議員議員の運動と、余黨員の運動との二なり、議員議員の運動は曰く整理員、議整理員相共に每日一堂に集會し、當日又は明日の議院の運動に就て約束すると是なり、余黨員の運動は曰く政治法律經濟の部門に分ち、若干名の專任委員を設け、平日に講究して、我黨の其篇の綱目を定め、以て我黨の政治的經典を作ると是なり、右の外道德的心術的の要點は、曰く小名譽心を去り、小功名心を去り、高尙なる奴隷となりて黨中役員の命を遵奉して、我意我慢の念を消磨し去ると是なりと論ぜり、

●日本　は一月九日の紙上に於て、政治家の多きに苦むと題し、今日の要は、我政治社界、許多の政治家あつて、一人の經世家なきにありと云へり。

●國會　は一月九日の紙上に於て、ニカラガ大運河企業者甲比丹アイロル氏來ると云ふ題を以て、彼れが大企業を稱賛し、其企業よりして生ずる世界經濟の變動を論じ、今回其日本に來遊するとを紹介し、而して日本の新聞紙が其來遊に關して冷淡なるとを責めたり。

通信

可愛子綴

●神奈川縣通信○廢娼建議　主唱者佐々木矣受郎氏は帝國議會に廢娼の請願を爲んとて客冬より本年にかけ縣下各地に有志者の調印を得ん爲め巡回せり左れば數

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

日を出でずして同氏は右請願を携へ議會に至るならん因に記す小田原町の有志者は大に奮發し同氏の其地に行きしを幸機とし廢娼部を設け後來大に同論の擴張に盡力する由。

○又 冬年縣會にて可决せし廢娼の建議を認可すべき樣知事淺田氏を訪ひ勸告せんと同氏等は目下其準備を爲し居るといふ。

●三重縣通信 ○三重縣教育總集會は一月五日六日兩日津市養正高等小學校內に開きぬ議題は（第一）試驗規則の改良案（第二）賞牌贈與の件（第三）孝子節婦の傳記を集め修身書を治る事（可决したり）（第四）中學校師範學校合併の非を各議員に忠告する事等なりといふ。

●高知縣通信 ○教育展覽會高知市第一高等小學校に於ては一月二日より六日迄教育展覽會を開きぬ同校生徒の自製物及び各尋常小學校及び中學校より寄贈せる圖畫習字作文裁縫品等を陳列したり又當市にある有名なる古代武器を陳列し頗る好評を博したり生徒の裁縫圖畫習字作文何れも上手にして評判爲めに宜し。

●巖手縣盛岡通信 ○女子敎育 當地にては中學校及師範學校とも女子部なく一も高等の教育を施す學校のなきは甚だ歎息なり。

○岩手禁酒會 同會にては一月三日夜盛岡醫會堂に於て新年會を開き富澤氏耶佐々木吉太郎外三四名の演說あり茶菓を喫して後將來の運動上につき談話會を開きたり因みに記す同會にては將來運動の資に供するため會員申合せ貯金する都合にて同夜其趣意書及心得を草したるものを報告せり。

●越後高田通信 ○文學會 同會は私立高田女學校生徒踏氏の組織に係る同會は英文には同校英語教師和文には鷹見爽鳩氏子を聘し孜々として研究講習しけるが此程課題烈女傳を起草せしは同校高等科生小出ちか子赤井虎吉大森みき子三氏にして就中小出氏は優等賞として本朝文範を得たりと同女子等はいづれも「女學生」に時々文章を投寄するとあるやに聞く。

○高城村女工場 元來當地に在りし橫濱加藤女工場高田支場は久々休業の處此度高城村女工場と改稱し森山信一氏が引受け再び開場する都合なりと。

女報

可愛子編

●常宮殿下の御衣 近頃赤阪離宮に伺候したる人の話を聽くに、折しも麗らかなる天氣、御園の梅笑を含む、偶ま佐々木伯爵夫人、稚き、玉の如き、常宮殿下を抱き率れり、間遠にして、確とは拜まれざりしも、殿下には木綿の御衣召させ給ひ伯爵夫人も同しく木綿の衣にて侍りぬと、吾人は實に之が爲めに感涙袖を濕すなり、輕薄、奢侈なる今の男女よ、之を讀んで而して悔改する所あれ。

●京都同志社敎會 に於ては、是迄女學校生徒は、會議の相談に預からざりしが、今度より凡て男女同等の權を以て、教會を治むるとに决し、既に實行せりとぞ。

●エスデール女教師 久しく京都府立高等女學校に在て、洋服裁縫、西洋家事經濟等の教授に從事したる、英國人エスデール氏は、今回大阪府立高等女學校に轉任したりとぞ。

●加藤米子 靜岡縣尋常師範學校助教諭たりし加藤米子孃は、昨冬十二月辭職して、出京したり、同氏は淑德の譽高く、女生徒教養の爲め、基督教婦人會の爲め、熱心に働かれたりしかば、去るに臨んで、人皆惜まざるはなかりしといふ。

●松島華子 女速記者の卒先者たる、同女史は此度名古屋より上京したり。

●京都府高等女學校長 たりし原田千五介氏は、京都府廳に轉じ、先きに同府學務課にありし河原一郎氏、代りて同校長となりぬ、同氏は、京都府教育會の副會長にして教育熱心家なりと聞く。

●松翠女學校 巖手縣盛岡なる松翠女學校は四五年前の設立にして、目下生徒の數四十名あり、學期は十四ヶ月にて卒業する由、校主は馬場霜代女史にして、裁縫唱歌等を、女史自ら擔任して教授するといふ。

●水戶地方の產婆集會 水戶地方の產婆三十餘名は、每月二十五日を期し、水戶市柵町なる、茨城郡役所樓上に集會し、每回醫士小林氏の臨場を請ひ、出產に關する學理、手術等の教授を受くる由なるが、近頃は爲めに得たる所少からずと聞く。

●遠州地方の女子職業 は一日の賃錢、辨當自分持にて五錢なりといふ。

●縣立師範學校卒業の女教師 は靜岡縣內に於ては、當今の處、月給六七圓位與へらるゝ由。

●學力撿定 一昨廿二年十二月より、廿三年十一月まで、東京府小學校學力撿定試驗を受け、之に及第せし婦人は五十六人なりといふ。

●看護婦の募集　芝區愛宕下なる、東京慈惠醫院に於ては、來る四月上旬、試驗の上、看護婦生徒十五名を募集するといふ。

●名古屋婦人慈善會　（第一）貧病院を設立して、疾病に惱む者にして醫藥看護の資なく、空しく非命の死を遂げんとする者を救ひ、治療を得せしむる事、（第二）貧家飢餓に迫り、凍餒に苦む者を救助する事、此目的を達せん爲めに建てたるは名古屋慈善會なり、會員は毎月五錢以上を納め、會費及び寄附金二十圓に滿つれば、銀行に預け置く規定なりといふ。

●横濱の流行感冒女學生を惱ます　流行感冒は、横濱市內各戶に侵入し、毎戶二人若くは四人頭を並べて伏す、遂に二三女學校の寄宿舍に攻め入り、一時は一校內三四十人も、床中に苦悶し居る樣は、誠に哀れにも、氣の毒なりし、去れば各教會の日曜日も案外に淋しかりしと、本年の萬國一致祈禱會も、此樣にては、例年の如き盛况を見ることを得ざるべしといふものあり。

●婦人洋行者の取締　近年身許不確なる者の、海外に渡航し、言ふさへ厭らしき淫賣をなし、我神聖なる日出旗を汚すとに、愛國心に富める我邦人の痛く慷慨し、悲歎し、落淚する所なりしも、今度神奈川縣廳に於て、婦人の洋行出願者を、直に旅行免狀を與へず、一應其身許を調査し、若し不確なる者あれば、懇篤に說諭して、渡航を思ひ止まらしむるやうにしたれば、海外淫賣者の數は、昨年十月頃に比して、現時大に減少したりといふ、吾人は我兄弟姉妹と共に大に之を喜ぶ。

●百歲以上の老媼　栃木縣下野國下都賀郡國分寺村大字小金井、青柳彥吉母りいは天明六年正月十日の誕生にして、今年今月、丁度一百六歲一ヶ月、實子一女一男あり、女の齡七十一歲、男の齡六十四歲、孫の數十五人、彥二十人、彌彥も既に二人ありといふ、又京都市上京區元誓願寺大宮東へ入る眞宗本願寺末光勝寺住職服部來淨氏祖母久野子は天明元年六月十日生れにして、今年今月、實に百十一歲なり、女子一人あり、其孫十一人、彥十二人あり、憲法發布の時、養老金を拜戴し、又廿三年四月京都　行幸啓の時には拜顏を賜りたる由。

●存娼雜誌　東京の存娼論者は、或る新聞社會二三の人々と相談し、横濱なる同論者と協議を遂げ、存娼雜誌を發兌せんとて、目下奔走中なりと、聞く所によれば、代議士の二三名も加入補助するとか、さても〳〵。

●全國遊廓懇親會の通知　廢娼妓、廢藝妓の論、益盛んなるより、之が防禦の策を談ぜん爲めにや、東京、大阪兩府遊廓の發起にて、來る二月十日を期し、兩國中村樓にて、日本全國遊廓大懇親會を開く旨、各縣に通報なしたりと、神聖なる日本の名も、咄、此醜業者の會議の冠詞に用いらる。

●醜業者の陳情書　京都に於て、遊廓移轉の建議出でしより以來、醜業者の狼狽一と方ならざりしが、去る六日各遊廓、各別に、府知事に向て、陳情書を出したる由。

●藝妓及び料理屋、待合屋　は近來何れも寂寥として、昨年來、雨後の蛙の如く繁殖せし、待合も其七八分までは倒產すべしとて、彼等は大に歎息し、心配せるといふ、吾人は此際彼等が早く正業に轉じ、實直なる世渡りをなさんとを望む。

●大分縣會廢藝妓に決す　大分縣會は、過半數を以て、町藝妓を廢し、料理屋旅籠屋の取締を嚴重にせんとを論決したり。

●廢娼の建議　熊本市郡部の有志者は、本月八日廢娼建議を差出したり。

●岐阜名古屋地方廢娼の氣運　地方の人士は總じて物事に熱心なり、昨冬より今春にかけて、東京廢娼會の飯野吉三郎氏は、岐阜、名古屋等に於て、追々運動せられたりしが、目下同地方の人士は熱心勃如として、頗る盛なりといふ、又飯野氏は今度歸京し、其紀行を作りて、廢娼上の景况を記するといふ。

●丈高く金多きが爲めに名あり　丁抹（デンマーク）國皇太子の妃は、身の丈六英尺二英寸（六尺一寸七分）餘あり、財產は外祖父和蘭（オランダ）のフレデリッキ公より讓り受けたるもの〻みにて千五百万弗あり、其外瑞典（スヱデン）の先王より、其全額を讓り受けて所有するといふ、妃の名は今ま歐族王族の間に高し。

●男婦マリヤ、カプリニ　是れより先き意太利（イタリー）の女傳道者マリヤ、カプリニは、南部埃及に在て、專ら布教に從事せしが、千八百八十三年一月十五日、僞聖マーヂの軍勢に生捕られ、獄中に投ぜられて、非常の酷遇を受け、且つ基督教を棄てて回教を奉ぜよと、强られたるも、毅然固持して從はず、爲めに僞聖マーヂの怒を惹き、殺されんとするまでに至りしも、幸にして免かれ、後二年を經て、土人の基督教徒に援け出され、面貌を亞弗利加人に見せしむる爲め、面部を黑色に塗り、晝夜兼行して、或は河を渡り、或は深林を橫斷し、兎角して進み、それより

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

本國意太利の汽船に乘じて、漸く去る十一月上旬、八年振りにて意太利に歸り、旣に再會を斷念せし其母及び其兄弟と相會し、近日又亞弗利加の傳道に從事せん爲め、再び意太利を出發するの意ありといふ、眞の勇婦といふべし、蓋し彼れの勇は血氣の勇、お轉婆的の勇にあらず、信仰に由りて得たるの眞勇なり。

●新攝政皇太后　和蘭の皇太后は、今度攝政の職に就かるゝ旨を、諸强國に通牒せられし處、英國皇帝及び佛國大統領は、特に懇切なる答辨を贈られたりと、新攝政皇太后には、每二週間に一回、ローの離宮より海牙府に赴き、政務を執らるゝ筈なりといふ。

●内外人結婚の數　昨二十三年中、神奈川縣廳へ、内外人結婚を出願したるものは八人なり、今ま之を區別するときは、英國人、瑞西國人に嫁したるもの各一人、外人に婚嫁せんと出願して、未だ許可を得ざるもの淸國人に二名、米國人に一名にして、婿養子として入籍したるものは、英國人に一名なりとぞ。

●伊藤伯爵夫人　は過月來病に罹り、療養の爲め、去る十三日、滊車にて小田原に歸りぬ、伊藤伯は同道して、之を送れり。

●豐田芙雄子　舊藩主德川篤敬侯に從て、伊太利國に赴き、昨年歸朝したる豐田芙雄子は、此程東京府高等女學校敎諭を囑托せられたり。

●村岡範爲馳、篠田利英二氏　は今度女子高等師範學校敎諭となれり。

週報

●官令　六月勅令を以て民事訴訟法第十四條に依り國を代表するに付ての規定を裁可公布せらる。

●政治　六日內閣會議●同日司法省會議あり●同日兩議院事務始●七日自由主義を執る在野の政治家議員矯正の大親睦會を開く●八日帝國議會開く●九日國民新聞發行停止せらる●十日誓視廳に會議あり●十二日內閣臨時會議●十三日いよ〳〵保安條例を施行し國會議員に對して暴行脅迫の虞あるもの五十六名を議會開會中皇城三里以外に退去せしむ。

●經濟　九日日本郵船會社の三池丸濠洲へ船行せんとて香港を出帆したり●十二日より東海道鐵道中御殿塲沼津間の複線を利用す。

●叢報　淸國皇帝の實父諄親王は陰曆十一月廿一日薨去せり●十一日正午能辯學會發會式大演說會。

品名	十一月四日
白米（一円ニ付）	
一等米	一斗〇升二合
二等米	一〇六
三等米	一〇九
四等米	一一五
五等米	一一三
正米（一円ニ付）	
肥後米	一斗四升七合
越後米	一五〇
越中米	一五四
美濃米	一五一
忍領米	一四五
雜穀（一円ニ付）	
本貫大麥	二斗四升五合
上州小麥	一六五
梅澤大豆	二一三
青柳大豆	二〇五
吟小豆	一五五
白胡麻	一二〇
黒胡麻	一五五
鹽（一円ニ付）	
赤穗	二俵五分五厘
大鹽	二六七
本齋	四三〇
新齋	四六二
醬油（一円ニ付）	
最上	樽八分一厘
極上	九五
上物	一三五
中物	一九〇
並物	二四〇
味噌（一円ニ付）	
上赤	貫六、七〇〇目
中赤	六、九〇〇
上白	五、三〇〇
紅赤	五、〇〇〇

品名	十一月四日
白木綿（一円ニ付）	
玉鶴	三反四分〇厘
綾鶴	三七〇
日ノ出鶴	四〇〇
若柳	三〇五
白梅	三八五
間銘	三九〇
絹糸（一円ニ付）	
本練花色上々	二匁四分五
色物上々	二三〇
赤白同	二三五
延糸同	二〇五
薄色同	二二〇
色物太練	二四〇
羽二重物	二三〇
極天上色糸	二三五
紡績器械物	四二五
同色物	四一五
八王子織物（一反ニ付）	
八端織	五円五〇
嘉平治平	五、〇〇
節仙臺平	七、五五
甲斐絹	四、二〇
節糸織	四、〇〇
一樂織	一〇、〇〇
飛地八丈	四、五〇
墨斜子	七、〇〇
黒八丈	八、〇〇
花色絹糸好	
生七十匁付	四円〇〇
同八十匁付	四、四五
同九十匁付	四、八五
同百匁付	五、三五
六丈絹猩々紅	
五十目立並	五、八〇
同別仕入	六、二〇

品名	十一月四日
乾海苔（百枚ニ付）	
新極上々	一円四〇
同上々	一、〇〇
同上	一、二〇
洲崎極上々	九〇
大森極上々	八五
深川極上々	九〇
潮田極上々	六五
製茶（一貫目ニ付）	
山城江州稀頭	二円四五
同大頭	一、九五
同小頭	一、六五
同中茶	一、二七
狹山稀頭	一、七五
同大頭	一、四二
同中頭	一、三六
同中茶	一、二〇
鰹節（十貫目ニ付）	
薩摩大上	一六円〇〇
伊豆上	一七、〇〇
遠州上	一六、〇〇
房總上	一四、〇〇
水戸磐城上	一三、〇〇
城の腰上	一六、五〇
南部仙臺大	九、〇〇
土佐大上	一〇、〇〇
石油（一箱ニ付）	
チヤスター	一円六六
ホーキ	一、六〇
デボース	一、六五
ロシヤ	一、六三
水油（一樽ニ付）	
地水	八円五〇
胡麻	九、五〇
荏油	一〇、〇〇
桐油	六、七〇

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

理化學的應用實効

三能 色を白くするしやぼん

定價一個十錢より

○抑此しやぼんは第一身躰の色を白くし。御顔の艶を出し。第二肌のしみ又はにきびそばかすをとり。第三種々のふきでものゝ毒を消すべき大効あり。故に名づけて三能しやぼんと云ふ。常に御用ひなされ候へば色を白くすること雪をも欺むく計りにして。性來色黒き肌。又は何となく色悪しき肌の御方始め自然に出來たる肌のしみ腫物の跡に至る迄御用ひなさるうち知らずしらず消えて艶美なる御肌になること疑なし。殊に諸傳染病の看病人など常に之れを用ひ身躰を洗ひなば其感染を防ぐことも受合あり御試用の上眞に三能しやぼんの名に背かざるを知り賜へかし。

●みづむし●糸かせ●いんきんたむしは常に御用ひなされ候得ばしぜんになをります。

製造人 西條重兵衛　猶くはしくは本能書にあり。

發賣元 東京銀坐一丁目 佐々木玄兵衛

特約販賣所

日本橋區通二小間物店 柳屋
同村松町寶丹水 岩濱長藏
同兩國廣小路五臟圓本舖 大木口哲
同瀬戸物町藥種問屋 玉置金八
同元大坂町清婦湯本舖 高木與兵衛
同上槇町萬金膏本舖 安川榮次郎
同馬喰町一丁目小町水 平尾贊平
同本石町二丁目十軒店 森谷萬次郎
同横山町一丁目洋物店 椙谷商店
同同町小間物問屋 近江屋源七
同坂本町角寶藥店 德田多助
同新右衛門町寶藥店 はたや
同親父橋角芳町 堺屋武ゐ
同通一丁目木原店席亭向 丸れこ
同芝神明鳥居内藥舖 岩本新兵衛
麻布區飯倉三丁目洋物店 宮島
同六本木町洋物小間物店 木村屋
同長坂町保玉散本舖 堀井
赤坂區一ツ木町角洋物小間物店 松下
同同町洋物小間物店 和泉屋
四ツ谷區傳馬町小間物問屋 山形屋
同十三丁目藥舖 河合治兵衛
同大通角小間物紙店 相摸屋
麴町區麴町三丁目藥舖 田部重兵衛
同同町小間物店 藤田屋
同三番町藥舖 雨宮藤吉
小石川諏訪町一等散本家 花樂堂
本郷區眞砂町藥舖 尾澤着生堂
下谷池の端仲町寶丹本舖 守田
同外神田富松町寶丹支店 長尾
同天神町一丁目寶丹支店 柳澤
同車坂町櫻香油本家 堺屋東兵衛
淺草區駒形町小間物店 中島屋百助
同黒船町樂屋洗粉本家 梅素亭
同西三筋町角小間物店 龜屋淺吉
同公園凌雲閣五階目出品 岩濱
同新畑町一番地子宮玉本舖 清水
神田區柳原通富松町寶丹支店 伴岱藏
同小川町銀杏木前藥舖 笠井賓生堂
同五十稲荷前藥舖 知新堂
同同所入口角洋物店 信盛堂
同錦町一丁目小間物店 西野小平
京橋區銀座二丁目 岸田吟香
同三丁目萬金丹本舖 ㊇藥店

同南傳馬町一丁目 伊勢屋藤兵衛
同竹川町角小間物店 丸屋松五郎
同八丁堀大通小間物店 和泉屋
同元數寄屋町三丁目藥店 結城屋
同築地二丁目賣藥店 近藤宗兵衛
同入船町四丁目角煙草店 橋本均一
芝區芝口一丁目十五番地 はしや
同櫻田伏見町角小間物紙店 豐田屋
同久保町交番所角 大菱堂
同佐久間町一丁目角紙店 服部
櫻川町藥舖 保生堂
同西ノ久保葺手町藥舖 山崎日進堂
同櫻田備前町毛利邸前藥舖 梅田
神田區治集舘内紙石鹸店 松壽堂
同表神保町二番地藥舖 教生堂
同同洋物小間物店 亭榮堂
同南神保町化粧品專賣店 おきなや
同一ツ橋通町七番地 北信堂
同同八番地 橋本吉助
同淡路町二丁目藥舖 眞壁
同猿樂町一郵便取扱所 吉村
同鍋町大通藥舖 中澤條助
同同町大木町店 齋藤辰造
品川宿停車塲構内洋物店 淺子
品川宿洋物小間物店 相川
●横濱尾上町四丁目藥舖 鈴本
●同賑町一丁目賣藥店 里見亭太郎
●同伊勢崎町洋物店 小池金次郎
●同太田町四毛糸編物所 山田
●同境町洋物小間物店 近榮
●同野毛町一小間物店 吉岡
●同辨天通四丁目角 信濃屋
●北海道函舘末廣町小間物店 新田
●横須賀旭町表門前 豊平屋
●同汐入町寶藥店 山本賀平
●同大瀧町洋物店 松本源次郎
●相州大磯茶屋町 三宅藤兵衛
●同小田原緣町諸色小間物店 油久
●静岡紺屋町 日上部源七
●甲府肴町藥舖 村田屋七右衛門
●仙台大町四丁目 高橋藤七
●東海道吉原唐物店 佐野屋熊次郎
●大坂市四ツ橋藥舖 本林丁子金
●仝安土町四丁目唐物小間物商 大崎組
●神戸元町五丁目 横田藥舖
●熊本市細工町二丁目 紅屋治三郎

右の外藥舖賣藥舖和洋小間物店に取次差出有之候に付御最寄にて御購求御試用の程願上候。

日本橋區銀町四丁目

高木法律事務所 公告

愛人而勿害人 ● 必也使無訴乎

代言ノ職ハ濟世ノ仁術ナリ故ニ高木法律事務所ハ紹介者ヲ要セズ況ク法律事務ノ依頼ニ應シ事件ノ大小ニ關セズ鄭寧深切ニ取扱ヒ且可成的報酬ヲ廉ニシテ依頼者ノ滿足ト訴訟費用ノ節減ヲ計リ殊ニ狂疾盲啞老衰幼年赤貧者等ノ爲メニ仁惠法律事務規則ヲ設ケタリ當事務所ノ目的ハ平素取引ノ相談ヲ受ケ豫メ紛議ノ發生ヲ防禦スルニアリマタ一旦訴訟起リタル事件ト雖モ和解ノ見込アルモノハ當事者間ノ情誼回復ニ盡力ス可ク若シ其見込ナキ片ハ法廷ニ趨ッテ權理自由ノ護衛兵トナリ誠實且熱心ニ依頼者ノ利益ヲ保護シ國家ニ對シ代言人タルノ本分ヲ盡サンコヲ誓フ

天吾ヲ祐ケヨ

法科大學監督試驗登第生 ● 法律經濟財政得業士

判事、試驗、登第生 ● 代言、試驗、登第生

代言人 ● ● 高木益太郎

墺國レンベルク獸醫學校教師ドクトル、アントン、バランスキー氏著

東京農林學校教授ドクトル獸醫學士與倉東隆氏

東京農林學校教授獸醫學士勝島仙之助氏 同譯

屠獸撿查法

附 乳汁撿查法

紙數貳百七拾頁○製本上等クロース金字入○正價金五拾八錢 郵税金六錢

此書ハ墺國レンベルク府獸醫學校ドクトル、アントン、バランスキー氏の原著にして西暦一千八百八十八年（明治廿一年）の印行に係る現今屠獸撿査書中最新の良書なれは東京農林學校教授獸醫學士與倉東隆並に東京農林學校教授獸醫學士勝島仙之助の二氏之を飜譯して農商務省の御所藏に爲せしか先般右原稿農務局より弊社へ御下附に相成り之を世に公にするの榮を得たれは曩に豫約を諾したりしに忽ち滿員となりたれは早速製本に取掛り今般出版致候間警察官獸醫衛生家牧畜家諸君續々御注文あらんとを希望の至りに候

東京市京橋區八官町一番地

牧畜雜誌社

● 女學生募集廣告

學期試驗ヲ終リ來一月八日第二期授業ヲ始ム今般米國人ゲップ女史來着教頭オルドリチ氏ヲ助ケ英語佛語獨逸語音樂ヲ敎ヘ和漢學ハ勿論裁縫編物茶湯活花諸學等女子ニ必用ノ學科ヲ授ク又二三科目以上ノ撰修ヲ許ス寄宿舍ハ適當ノ日本婦人之ヲ管理ス規則書望ノ者ハ郵券二錢ヲ送レ

麴町區上六番町十七番地

開成女學館

（● 基督教新聞發行所）

● 預言之發達 定價六十錢
● 讃入讃美歌 全 二十五錢
● 羅馬讃美 全 十五錢
● 聖經年表 全 二十五錢
● 神學提綱 全 五十錢
● 基督教ノ基本 全 七十錢
● 基督一代記 全 五十錢
● 福音初步 全 二十五錢
● 聖書辭典 全 壹圓廿五錢
● 聖書語類 全 壹圓
● 教會歷史 全 壹圓三十錢
● 基督信者要性 全 十八錢
● 歷史上ノ基督 全 二十五錢
● ポーロ一代記 全 十八錢
● 學生之大會 全 二十五錢

[illegible]

（● 六合雜誌發行所）

◎ 鳥と獸のはなし 定價四十錢
● アブラハム倫古龍 全 二十五錢
● 清教徒紀事 全 二十錢
● 立志之礎 全 三十錢
● 政教新論 全 二十五錢
● 神之顯現 全 二十五錢
● 基督教及佛教 全 二十錢
● 基督教及哲學 全 廿五錢
● 眞理一斑 全 三十錢
● 路撤傳 全 五十錢
● 基督教及國家 全 八錢
● 現今唯物論 全 十二錢
◎ 人類之時代及起原 全 十二錢
● 不可思議論 全 十二錢
◎ 天啓理學合一論 全 十二錢

[illegible]

新橋出雲町 ● 警醒社 ● 新橋出雲町

定價

一冊。	六錢	郵税。五厘	（但府内無郵税）
十一冊。	五拾八錢	郵税。五厘	（同 前）
半年分	壹圓四拾三錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は	貳圓八拾六錢

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌新年附錄の評

元旦發兌の女學雜誌は中島俊子、吉田伸子、小島清子、田邊花圃、清水豐子諸女子新年始筆の新論を編輯し、繪曆、米國禁酒大會堂の細圖を掲げ別に二十頁の**大附錄**を添え、雲峯子草する所の長韻文（知盛卿）、及び露子女史新作の（こわれ指環）を掲ぐ。知盛卿は沈痛悲慘の調帋向に潤ひ一唱坐ろに涙の滴々たる心地す。こわれ指環の作者は本年始て文壇に登る、其小說の眞摯にして鬱勃たる慷慨にして哀れある當今年少女性の哀情を穿表して遺すことなし、讀者若し一讀せば、女學雜誌が前年若松賤子を紹介し本年亦此女秀才を誘出するの多福あることを歎ずべし。此韻文は松の梢の戯欷するが如く、彼小說は草頭の露の滴々下するに似たり、請ふ閲覽せよ、右女學雜誌一册六錢。郵稅五厘。

如此きは只だ吾社が自畫自贊するにあらず世評概ね如左

露伴氏の評 國會新聞帋上

一月一日發兌の女學雜誌附錄に知盛卿と題せる韻文あり流麗纖緻愛誦すべし唯勇壯の事を叙する段にも七五の調を用ひられしに故に優美の姿餘りありて凜然の氣足らざるを覺ゆるを憾むべしと爲す雲峯子の技倆は殘花子と併び立つて韻文壇上に温和派の領袖たるに足る可し我新年第一此詩を得て一快字を呼ばざるを得ず其十ペーヂ左肩に

まだ風寒み水車みな瀨にひゝく澱河の水際の葦に霜見えて僅に匂ふ朝日影

と云へるなど何等の妙ぞ是等の云ひ廻しは之を湖處子梅花子等急激派の人に求むるも終に得難かるべし

こわれ指環は好小說といふべし、其無毒なる其温雅なる其平易なる猶且つ其中に包含されたるものゝ大なる實に短篇を以て輕々看過すべからず又女流の作を以て輕々看過すべからず若し忍月居士が精神論に照らして之を評さば破れ指環は古結婚法の不完全といふ事を說明したる者なりとして揚げむ若し不知庵主人の觀念論によつて判せば自己の欲せざるところを人に被らせむとの大悲願より成りし者として尊ばむ、我が見る所を以てすれば唯壓制干涉を擅にして得々たる世間の愚父愚母を諷するの好譬論としてこわれ指環を愛せんのみ、惜夫作者の眼は古風の習慣が不幸（結婚）の基をなせるとを見て未だ新來の理想が不幸（離縁）の助をなせる點に注がず是を以て八ペーヂあたりは匆々として物足らぬ心地す、然りといへども其人夜歸遲くして而も酒氣を帶びながら隨分氣樂な先生だなどゝ妻を責る邊都て寫し得て其妻が不可言の所感を讀者に悟らしむる技倆感ずべく又其前後の一句は絕望の中に希望を維ぎて戚々と逼らず所謂哀んで傷らざる者非耶、方今文壇才女多し又爰に一人を増す女學雜誌社が悦び知るべきなり

石橋忍月氏の評

予舊冬より新年にかけ旅行中にあり、爲めに一切眼を新聞雜誌に絕ち、併せて執筆の煩を避く、歸家の後机上を瞰すれば、新年前後に現出せし諸詞兄の著作堆し、中に就て讀むべきもの、評すべきもの頗る多し、茲に左の著作に就いて漸次に詳評若くは略評へ加へんと欲す、

七、女學雜誌、こわれ指環、知盛卿。

森田思軒氏 主筆の報知新聞評

女學雜誌新年の初刊頗ぶるニギやかなり其の附錄に掲げたるつゆ子氏の『こわれ指環』流調に晴れたれど昨年の附錄しづ子氏の『わすれがたみ』に比してはヤゝ見劣りするやうなり、時事欄に於て『明治二十四年』の一項感念秀麗蓋し女學雜誌記者最も得意の調。

朝夷知泉氏 主筆の東京新報評

●女學雜誌は本年の初刷第二百四十六號を一月一日に發兌せり中島俊子女史を始め女性記者の新年試筆を掲載し且つ特別附錄を添ふ之には雲峯子の新體詩「知盛卿」てふ長編とつゆ子女史の手に成れる「こわれ指環」てふ小說を掲げたり女史は今回を以て文壇の初陣とする由あるが其作意は女大學的の弊を矯めて女子の幸福を全うせんとするにあるが如し結末、只此上の願には此こわれ指環が其の與へ主の手に依りて再びもとの完きものと致さるゝ事が出來るならば」と訴ふる所一段憐れに聞ゆ。

田口鼎軒氏主筆の經濟雜誌評

本年の初刷第二百四十六號を一月一日に發兌せり、中島俊子女史を始め女性記者數名の文章を掲載せり、附錄には雲峰子の新躰詩「知盛卿」及びつゆ子女の作の係る小說「こわれ指環」あり、女史は今回が文壇の初陣なる由なるが、其の作は先づ可なりの出來なり、若し注文を云はしめば小說中の主人公たる女子の良人が其女子に對する不人情不親切の所爲を今少し委しく述べてほし、離婚の理由稍や輕きに失するの觀なきにあらず、

明治二十四年一月一日發兌

女學雜誌附錄知盛卿の部正誤

		誤	正
一一頁	上段十四行	かゝらん	かへらん
仝	下段三行	やどをとり	やどをかり
仝	下段十三行	夜半は	夜半に
一三頁	上段七行	御坐船をば	君のみ舟を
仝	上段八行	さむらふ	さふらふ
仝	下段一行	うち惜しや	くち惜しや
仝	下段三行	ひら	たひら
十四頁	下段十三行	あやふ	あやう
十五頁	上段三行	あるぶ	あらぶ
仝	上段十八行	消えて	消えはて
仝	中段九行	はなく	はかなく
十七頁	中段十二行	こそは	なりて

文明之花實廣告

毎月四回發行
一枚代價一錢五厘
一ヶ月前金六錢

目次

一社會○總論○創世記（白井笑而）一政治○總論○族長政治
○百獸會議之圖（方外子）一法律○總論○刑法釋義○獵師山
誤殺人之圖　一經濟○總論○家事經濟○社會經濟○明治廿四
年度歳入歳出○豫算案○雜誌（方外子）一農業○總論○農業
統計表○蜜柑貯藏法○桑木接木法○鷄ノ病ヲ治療スル法○雜
誌（方外子）一工藝○染色○石鹸○紙製ハンケチ○摺付木○
コークス○簡便電氣ノ諸製法○西洋洒法○鎭火水製法○硝子
壜ヲ截ル法○瓢ニ色ヲ付ル法　一衛生○總論○空氣○火塲ノ
妙藥○毒虫ニ刺レタルヲ治スル法○脚氣治療法○目藥ヲ製造
スル法○凍死ヲ救フ法○虫齒ニゴムヲ塡メル法○上等スープ
製法○水ヲ清潔ニスル法　一商業○各國商況○商業統計一
鑛學○石炭○金屬　一芳譚○十九世紀ノ漲人自席（寺塊居士）
一詞林詩○詩五題○歌六題（弄塊居士）一漫言○男女情死
ノ圖付タリ十九世紀ノ有志談

本月十五日發行　麴町區飯田町五丁目三十番地　賑民社

醫科大學産科婦人科及小兒科病室參考書
群馬縣其他師範學校高等女學校并小學用書

はゝのつとめ

親の卷　妊婦産婦の心得　定價金三十錢（郵稅二錢）

子の卷　日本育兒法　定價金四十五錢（郵稅四錢）

右は我國無雙との好評を博したる母子衞生書あるが今般增補訂正の上再版したりクリスマス婚姻出産の贈物としてもこよなき好品なり。

書肆　通三丁目丸善。表神保町中西屋。馬喰町島利。春木町島利支店。通塩町中央堂。

下六番町　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

田口鼎軒氏主筆の經濟雜誌評

本年の初刷第二百四十六號を一月一日に發兌せり、中島俊子女史を始め女性記者數名の文章を掲載せり、附錄には雲峰子の新躰詩「知盛卿」及びつゆ子女の作の係る小說「こわれ指環」あり、女史は今回が文壇の初陣なる由なるが、其の作は先づ可なりの出來なり、若し注文を云はしめば小說中の主人公たる女子の良人が其女子に對する不人情不親切の所爲を今少し委しく述べてほし、離婚の理由稍や輕きに失するの觀なきにあらず、

女學雜誌附錄知盛卿の部正誤

明治二十四年一月一日發兌

		誤	正
一頁	上段十四行	かゝらん	かへらん
仝	下段三行	やどをとり	やどをかり
仝	下段十三行	夜半は	夜半に
一三頁	上段七行	御坐船をば	君のみ舟を
仝	上段八行	さむらふ	さぶらふ
仝	下段一行	うち惜しや	くち惜しや
仝	下段三行	ひら	たひら
十四頁	下段十三行	あやふ	あやう
十五頁	上段三行	あるぶ	あらぶ
仝	上段十八行	消えて	消えはて
仝	中段九行	はなく	はかなく
十七頁	中段十二行	こそは	なりて

文明之花實廣告

毎月四回發行
一枚代價一錢五厘
一ヶ月前金六錢

目次

一社會○總論○創世記（白井笑面）一政治○總論○族長政治○百獸會議之圖（方外子）一法律○總論○刑法釋義○獵師山誤殺人之圖　一經濟○總論○家事經濟○社會經濟○明治廿四年度歲入歲出○豫算案○雜爵（方外子）一農業○總論○農業統計表○蜜柑貯藏法○桑木接木法○鷄ノ病ヲ治療スル法○雜誌（方外子）一工藝○染色○石礦○紙製ハンケチ○摺付木○コークス○簡便電氣ノ諸製法○西洋晒法○鎮火水製法○硝子壜ヲ截ル法○瓢ニ色ヲ付ル法一衛生○總論○空氣○火鳩ノ妙鑠○毒虫ニ刺レタルヲ治スル法○脚氣治療法○目藥ヲ製造スル法○凍死ヲ救フ法○虫齒ニゴムヲ塡メル法○上等スープ製法○水ヲ清潔ニスル法　一商業○各國商況○商業統計一鑛學○石炭○金屬　一芳譚○十九世紀ノ溷人自席（寺塊居士）一詞林詩○詩五題○歐六題（弄塊居士）一漫言○男女情死ノ圖付タリ十九世紀ノ有志談

本月十五日發行　麹町區飯田町五丁目三十番地　販民社

醫科大學產科婦人科及小兒科病室參考書
群馬縣其他師範學校高等女學校并小學用書

はゝのつとめ

親の卷　妊婦產婦の心得　定價金三十錢（郵稅二錢）
子の卷　日本育兒法　定價金四十五錢（郵稅四錢）

右は我國無雙との好評を博したる母子衛生書あるが今般增補訂正の上再版したりクリスマス婚姻出產の贈物としてもこよなき好品なり。

書肆　通三丁目丸善。表神保町中西屋。馬喰町島利。春木町島利支店。通塲町中央堂。

下六番町　女學雜誌社

女學雜誌

第二百四十九號　明治二十四年一月廿四日發

知盛卿の評　池袋清風
新島襄先生　其墨子
勞役　社説
德を樂む人　松村介石
こはれ指環評　不知庵

下六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY